

第35回 特別研究会
「大学に求められる空間の性格」

笠嶋 淑恵 (建築家)

1999年3月17日 南山短期大学にて

「大学に求められる空間の性格」

笠嶋 淑 恵 (かさじま・よしえ)



- 1950 名古屋市生まれ、父親の転勤に伴って中部圏の地方都市を転々として育つ
- 1972 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1978 読売新聞住宅設計競技「光のある家」佳作入選
- 1979 市浦都市開発建築コンサルタンツ東京本社勤務を経て一級建築士事務所 笠嶋建築工房開設
- 1980 久保田鉄工住宅設計競技「甦える日々ー名古屋市郊外編」3等入選
- 1981 愛知建築士会主催「生山分譲住宅」設計競技「ライトウェルのある住宅ー名古屋市郊外編」入選
- 1983 “濃尾平野の家”にて中部建築賞入選
- 1986 やまさと保育園、R・シュタイナー幼児教育思想に基づく改修の為に、西ドイツ、スイスへ、ヴァルドルフ幼稚園、学校、病院等（R・シュタイナーの人智学に基づく建築）の視察
- 1989 “風を聴く家”にて中部建築賞受賞
- 1992 住宅都市整備公団個性派住宅“空を遊ぶ家”にて「すまいる愛知住宅賞」受賞
- 1993 “空をはらむ波” いきいきプラザ大府にて中部建築賞受賞
- 1994 “地に還る波” 大府デイ・サービスセンターにて中部建築賞受賞
- 1995 “2つの空” 小原村編にて中部建築賞受賞、及び愛知まちなみ建築賞受賞
- 1998 西ドイツ、スウェーデンへR・シュタイナーの人智学に基づく高齢者施設等視察
- 著書 「ゆとりある住まい」共同執筆 愛知ゆとりある住まい推進協議会5周年記念出版

名古屋工業大学、三重大学にて非常勤講師を歴任、現在は、大阪芸術大学、椋山女学園大学、名古屋大学にて非常勤講師を兼任、日本建築学会作品選集本部審査委員、愛知県地方計画委員会専門委員

大学に求められる空間の性格

01. 'どう見えるか' から 'どう感じられるか' へ

視覚から感覚系の全体へ 知覚の深化, 総合化, 空間を体験, 体感する
建築の構想=ひとの流れと溜まりのストーリー+各々の空間の性格付与

ex. 方向付け→行為の拡散→方向付け→行為の拡散→方向付け→
意識化・・・「空間とひとの感応関係」

ex. 機械生産と手作りの違い

手作り→思い入れの痕跡→意識化の契機→

感覚系の振幅—思考の粹組み

02. 醸し出される空間の性格

・・・壁, 開口, 天井の形態と色彩によって、

混じり合わない, 差異を明らかに・・・異なる性格の並存

ex. 大きな広がり・外向性+小さな拠り所・内向性・

包容性・防護性+崇高性, 宇宙を暗示する広がり

緩やかだが, 確かに, 明らかに

ex. 焦点を意識化 空間を染める色彩

●G・バシュラル空間の詩学から

詩的夢想・・・精神はくつろげる

たましいは緊張をとき、静かに、しかも活発に、目覚めている。

→思考が飛躍する

家(=全ての建築の原型)が夢想をかくまい、夢見るひとを保護し、

我々に安らかに夢みさせてくれる

心理的深化に有効な停止した時間のなかに停留する

→洞窟のような空間(骨董商アンリ・ポスコについて)

大都市のいえ(無性格な空間)には鉛直性の内密な価値がないうえに、

さらに宇宙性がかけている

日常—非日常 感覚系の振幅—思考の粹組み

ex. ひとの行為・状態と空間の性格との関係

行為・状態 空間の性格

こもる, 自己分析, 瞑想・・・内向性, 内密性, 閉鎖性, 防護性,

交流 ・・・外向性, 開放性, 包容性

意識の集中 ・・・中心性, 求心性, 防護性

緊張 ・・・規則性, 中心性, 求心性

リラックス ・・・包容性, 防護性, 浮遊性

出会い ・・・交錯

表現 ・・・中心性, 求心性, 防護性

03, 学習・研究共同体としての大学

目的空間—非目的空間

●目的空間

用途が決まっている空間

1 方向講義, 対話的議論, 体験学習

意識の集中の度合い・・・焦点

壁と開口, 天井の形態

日常から非日常・・・喧噪から距離を置く

精神性, 内密性, 浮遊感

→創造的思考のバックグラウンド

●非目的空間・・・用途, 行為が限定されていない空間

コミュニケーションの契機を仕掛ける・・・空間, 場の性格付与

ex. ひとの流れと溜まり

立体的なひとの流れの交錯・・・見る, 眺める→観察

ひとや情報との印象的な出会い・・・ひとの流れの曲がり,

アイストップとなる壁

→多様な行為を誘発する

行き過ぎる 見る 見られる 眺める

・・・他者を眺める→観察する・・・憧憬, 畏敬, 尊敬→自己成長の動機

休む 居眠りをする 佇む 読む 暇をつぶす 日向ぼっこをする

ぼーっとしている

・・・学習共同体への帰属感・疎外感→自分の居場所があると感じられる

出会う 挨拶する 待つ 誘う 議論する おしゃべりする 集まる

アジる だべる 表現活動

・・・学習共同体の形成

●大学側の優れたビジョン

‘受入れ, 異質性との共存, 交流の意志’ の表出

●教育理念の建築的表出

南山短期大学キャンパスの囲われた外部空間に象徴される空間の性格

親密さ, 教師間、教師と学生間の他者を尊重する影響関係, 信頼関係

→継承, 発展



グラバア :

それでは1998年度の間関係研究センター、特別研究会を始めたいと思います。今日は建築家の笠嶋淑恵先生をお迎えいたしまして、大学に求められる空間の性格という教育に関して、いままであまり切り込んでこなかった新しい切り口で、お話いただけることになりました。そういう新しい刺激を受けて教育というものを、ホリスティックにより豊かに考えていくチャンスにできたらと考えています。それでは講師のご紹介です。笠嶋さんは、日本大学理工学部の建築学科をご卒業されて、都市設計のようなお仕事にも携わり、名古屋の南山大学の近くに建築工房を開き、この地域で活躍をされている建築家でいらっしゃいます。個人宅もお作りになれば、公共の施設もお作りになるという形で、中部建築賞という大きな賞をとっていらっしゃる、現在、活躍中の建築家でいらっしゃいます。どうぞよろしく申し上げます。

笠嶋 :

笠嶋です。私は丁度団塊の世代の一番最後に当たります。大学時代は、人と建築の問題、それから都市的な問題などに、建築を勉強している多くの人が、関心を持っていた頃でした。私自身も学生時代に都市計画事務所に出入りしたり、東京の事務所にいました時は、公共的な大規模の都市部あるいは郊外の住宅地の計画、それから、都市計画と建築の中間のような土地利用計画、そういうこともしていましたので、建築と都市の関わり、それから、道と建築、そういう建築との接点での人と建築にも関心を持っておりました。ただ、あまり大規模住宅地計画の方向にいつてしまうと建築の空間というものを構想する、と、いうかなり根気のいる仕事ができなくなる様に思いまして、ちょうど28歳の時に、名古屋に戻ってきまして、それから主に、建築の設計に絞って仕事をしております。都市的な感覚とは建築群の構成、景観構成などを含みますから、今日のお話に係わるキャンパスにも当てはまります。今日、最後の方でお見せするスライドは、大府市に最近、愛知健康の森の施設が出来たとおもいますが、それに先立って、21世紀の高齢化社会に向けた、前愛知県知事の重要施策の一つである、いきいきタウンが、大府市の午池という所に、1992年から建設されました。私がある中心地区の全体計画をし、建築の設計まで担当したものです。この仕事も、群建築による景観形成、共同体形成の契機をつくる仕事でした。今日の私の話は、先日南山大学の新学科の講義棟の計画案を出ささせていただきましたので、それにまつわるお話ということで、「大学に求められる空間の性格」というテーマでさせていただきたいと思っております。

まず、レジメに書きましたように、「どう見えるか」から「どう感じられるか」というのがサブテーマです。建築というのは、多くの人に見られる存在ですから、どうみえるか、美しい存在であるとか、視覚の対象としてとらえられていることが多いんですけども、実は、人の心と体と、言わば、感覚系の全体で、体感されるものだと、私は考えています。もちろん、建築というのは、

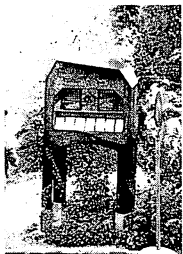
とても幅が広く多岐にわたる用途をもつものですから、それだけではなく、基本的な機能に対する要求が、まずありますが、そのあたりは今日の話では省きまして、むしろ、多くの方にとって、このような視点をぜひ持っていただきたいと、私が考えている「空間の性格」という視点で、建築を見ていただき、大学の講義室の計画に対する示唆を汲み取っていただきたいと思います。まず、前半は、「空間の性格」という観点から、いままで私が設計いたしました建築と、それから12年前と今年、人智学の建築を見て参りました時に、撮りましたスライドをお見せしたいと思います。「空間の性格」というものは建築空間と、自然、あるいは社会と人、この三者が絡み合って、空間の性格が醸し出されると私は考えておまして、それらの関係が、的確に人智学の建築では作られています。単に視覚だけではなく、感覚系で建築と向き合っている、という意識がはっきりとあります。そこにはトリックがない。それが人智学の建築に対する、私の一番大きな関心なんです。そういうことから、人智学に基づく建築についても、お話の中に入れてたいと思います。人の感覚系と建築、そして空間の性格ということを考える時に、私がバイブルのようにしてるのが、「バシュラールの空間の詩学」という本なんです。それについてもお話しの中に入れてたいと思います。

このスライドは、ゲータアヌムの遠景です。写真でご覧になった方もあると思います。現地で、周囲の景観の中でみますと意図が、はっきり解かるように思われます。丁度大地から、もっこりと芽を出した生命体というような見え方です。私たちが建築を知覚する、認知する時にさまざまなイメージを感じとるわけです。これはゲータアヌムの案内板です。これを見た時に、手作りのものと、機械で作られたものの、私たちに与える影響と云いますか、どんなふう感じられるかという、その違いについて考えさせられたんです。これは、鉋のようなものでポンポンと削りとったような作られ方をしています、鉋を振るう手の勢い、精神の集中、それからこれを作った人の感性、様々な思い入れ、そういうものが、手の痕跡として残っていると感じられます。そのことの意味をずっと考えさせられたんです。私は書道が好きで、書を見て、とても心引かれる書というのがあるわけです。そういうものとの共通項が、この案内板にありました。書き手の、ある精神の状態が、そこに痕跡として残っていたり、手がつんできた修練と云いますか、研鑽がそこに要約される。それが、見る側に何か伝わってくるから、手作りのものには、独自の存在意義があるということ、これを見て感じさせられました。この荒削りさを、なめらかにしてしまいますと、痕跡としては弱まってしまう。むしろ粗い状態だから、伝わってくる。それはものを作る時の、大きなヒントではないかと考えさせられたのです。

次は、ゲータアヌムの中心にホールがありまして、そのサブの出入口なんです。これは先程のことと共通しますが、襷をつくることによって、たぶん、この前に立ちますと、吸い寄せられるような感じがするだろうと思います。つま



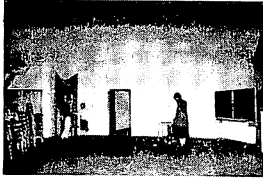
ゲータアヌム遠景



ゲータアヌム案内版



ゲータアヌム主ホールの副出入口
壁を作りながら穿まる開口



ブリースターゼミナール宗教講義室

り、出入口というのは、本来人を吸引する様な性格が求められます。それから、建築的にいうと、向こう側へ向かっていく方向性が、ここには感じられます。ですから、案内をするというような、言葉を介さなくても、すうっと行ってしまふ、そういう形態だろうと思います。こういうものも、空間の性格です。これは、ブリースターゼミナール、キリスト者共同体の宗教講義室です。この空間を見て、天井と壁の接線をなぜ斜めにしているのかという疑問がわきます。これは明らかに人を包み込むような性格を持っているわけです。なおかつ、光をぐうっとしぼって、開口部をあまり大きくとっていないものですから、内向性、意識が内側に向かっていく性格を持っています。この内向性に加えて、人を包み込むような性格、これがレジメでは、包容力と書いた性格です。これは、屋根裏部屋などがもっている性格と共通するんです。いくつかこういう形態をみていましたら、屋根裏部屋の天井の天辺部に水平の板を張って、出来上がった空間かなと思ひ至りました。こういう空間が持っている包容力が、私は現代人、子どもも、大人も、それから高齢者にも、必要ではないかと考えています。というのは、内向する時間を持っていない人が多いと思われるからです。それはなぜかと考えますと、多くの空間が、人の気が散るような状況ではないだろうかと思ひます。社会、情報から遮断されて、パシュラールの表現を借りますと、「精神はくつろぐ、魂は緊張を解き、静かにしかも活発に、目覚めている。」つまり、落ち着いて眠ってしまうわけではなく、精神は覚醒している、意識は覚醒している、落ち着いて何かに浸りきれ、そういう空間が、今重要だろうと考えます。もう一つは色の問題です。人智学の建築では、色は意図的に使われていまして、ブルーは、崇高なもの、精神性、そういうものを感じる色だと思ひます。スライドだとよく解かると思ひますが、壁に色が塗られていて光を受けることによって、空間がその色に染まってきます。単に壁に色が塗られているのではなくて、空間自体がブルーに染まっていく、そういうことまで意図されているというふうに考えます。この入隅部が、丸くしてあるということも重要で、先程、荒削りな状態がそこに建築家が込めた様々な思いを意識化されやすいと言ひました。それに加えて「ディテールに神が宿る」というふう近代建築のある巨匠が言ひていますように、大きな構想と、そのディテールにも、思いが込められているわけです。

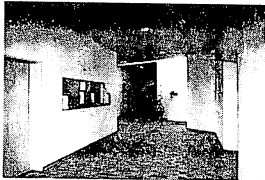
山口：

今一連に見ているのは、一つの部屋なんですね。

笠嶋：

一つの部屋です。これは玄関ホールなんです。ここでは、色がいくつか使われていますけれども、こうやって見ると、ばらばらに見えるかもしれませんが、私には溶け合っているようにもみえまして、たぶんこの色が主の色です。これに少し影響を及ぼしながら、色が溶け合うという感じです。これは階段なんです。ここでも、色がいくつか使われているんですが、私達は、たぶん、この空

間に最初に足を踏み入れた時は、ばらばらの色として感じるんです。ところが、しばらくいますと、一つの空間の色として溶け合う、そんな感じがします。これはとても意味があるんです。あらかじめ色を混ぜない方が、光を媒介にして、鮮明に色彩の効果が現れます。このカーテンなんです、紗のカーテンを二色重ねていまして、時と場合に応じて、中が薄紫というかピンク、そして表が濃い紫で、これを紫の方だけ開けたり、ピンクだけ閉める。そういうことをして、例えば、ここでファンタジーをお話する時は、少し濃い紫にして、もっと空間を内向させる。一方、意識を外向させようとする時には、全部開けてるだろうと思うんですが、そういうことを、紗のカーテンでしています。このカーテンの2色を、ピンクは全部閉めて、紫を半分重ねる、あるいは、紫の重ねる分量も微妙に変えたりして、ニュアンスに富んだ演出を可能にしていると思います。紗のカーテンは光を透過しますから、空間の染まり具合の変化は、微妙さにおいても、又性格のあざやかさにおいても、効果が大きいと思います。



人智学に基づく看護師養成学校の廊下

これは、看護師養成学校の廊下なんです。後程、大学に求められる様々な要素として、お話したいと思います。廊下とか、キャンパスの中の道とか、そのような場所、すなわち、移行空間、動線空間というのは、私達が目的空間に対して、非目的空間とすることができます。人によっては、不特定目的空間と言っているようですが、直接の目的を持たない場所というのが、実は、建築でもキャンパスの生活でもとても重要です。なぜかと言いますと、ここには、様々なコミュニケーションの可能性、きっかけがあるわけです。その時に、ただの道であったり、そこに何も性格がない場であったり、仕掛けがない、そういう道や廊下ではなくて、小さなくぼみだとか、独立柱であるとか、壁がちょっと出ているとか、そういうところが、人の寄り所になったりします。ここでは、途中でクランクしていることが、意識をそこに集中させることになりまますので、そこが、何か演出的な、例えば絵であるとか、物であるとか、展示があった時に、そこに、人と物の印象的な出逢いというもの生まれます。このような意味で、廊下が曲がっていたり、入り口の前に、小さなくぼみがあったり、ということは、コミュニティーを仕掛ける、人と人の様々な接触を仕掛ける、その様な可能性に満ちていると考えます。これは、上にトップライトがありまして、先程の廊下も、あそこに焦点がぐうっと強く感じられたのは、上から光が落ちているからです。ですから、全体に明るくするよりも、どこかに焦点をあてて、つまり、空間的な焦点と、光による焦点の意識化、空間の性格の意識化、場の意識化、そういうことは、光の入れ方の計画上重要です。薄暗くしたところに、光を置く、という二つの効果を合わせることで、さらに印象的な場、磁場が生まれます。同じところなんですが、ここはいくつも壁があって、先程のゲテアナムの出口と同じように、壁というのは、とてもニュアンスに富んだ性格があって、一気にすうっといくのでもなく、何か柔らかく人を誘い込んだり、流れを作ったり、空間の性格の意識化を計る時に、あまり強く働きかけるので

はなくて、何か柔らかく、通り過ぎてしまう人もいるかもしれないけれども、気が付く人がいるかもしれないぐらいの、あるいは、知的に理解されなくても、何か気になる、意識に引っ掛かる、というこのような性格の出し方というのは、私から見ると、とてもまいと感じるんです。強くなくニュアンスに富んだ性格付与法です。これは、廊下の壁をだんだん折り曲げながらすぼませているんですが、天井も同じように下げていることによって、空間が、すぼまっていく、ということをして、より効果的にしています。現代の建築というのは、近代建築以降、トリック的な手法も採るんです。つまり、仕掛けがわからない様に、ある性格を出したりするんです。それに対して人智学的な手法というのは、仕掛けを洗練した形で見せたり、仕掛けを隠すのではなく意識化している。その辺が決定的に違うところだろうと思います。ここでは内向する空間をつくりながら、光を採り入れる、一つの方法だろうと思うんです。上の方から光が落ちるように、ハイサイドライトがあって、壁に光が落ちるようにしています。落ちつける空間になるか、ならないかは、壁の位置が、とても重要だと私は思っています。ですから、壁が適切な位置にない空間というのは、落ち着かないんですね。基本的に、人の背中に大きな壁がないと落ち着かなくなってしまう。また、壁が少ないと、人が動きまわる動的行為の為の空間にはいいけれども、落ち着く空間にはなりにくいという、空間の性格との対応関係があります。こういう風に、光が上から落ちてきますと、光をあてた壁があることによって落ち着くけれども暗くないという、上からの光によって、理想を暗示しながら、内向する性格を醸し出すことができます。これはヴァルドルフキンダーガーデン（R・シュタイナーの幼児教育理念を実践する幼稚園）です。ここがオイリュトミーをする部屋です。空間的に言いますと、正円より楕円の方が、ゆるやかな性格を持っ



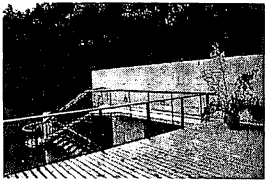
ウーラントヒューエ幼稚園 オイリュトミー室
緩やかな動きを孕む楕円形の空間

ています。そのゆるやかな性格を持ちつつ焦点が生まれ、いわば求心性がある。ですから意識が一つにまとまっていきます。ですから、グループで、例えば、20人とか30人の人がここに居ても、意識としては内向してる、外に気が散らない。そういう代表的な空間というのが、円とか楕円です。ここで、もう一つ重要なことは、天井が壁と同じ材料ではないことによって、壁の楕円、カーブしている壁が強調される、意識にはっきりと伝わってくるわけです。天井まで同じ材料にしてしまうと、ドームになりまして、より強い求心性が出ます。天井が抜けているために宇宙を暗示し、自由な感じを醸しつつ求心性を持っている、そういう空間であるといえます。建築の内部空間でも、外部空間でも、基本的な考え方は、共通しています。この敷地は、反対側に斜面があって、この壁を背中にした時に、山の斜面を望むことになります。ということは、自然の地形によって、向こうが閉ざされ、そして、こちらに、壁があることによって、この外部空間というのは囲まれ、守られた感じがします。この壁の効果は大きいです。この壁は何のために、こんなに長くしてあるんだろう、と思うんです。これがあることによって、この外部空間が、緩やかに、囲い込まれます。これによって、幼児が守られていると感じ、各々の行為に浸りきれます。これは、幼児に限らないと思います、周囲がすっぽ抜けて見える所は、まわりに注意を払わなければならないという心理が働くために落ち着きません。レジメには、この性格を保護性では弱いと思ひまして、防護性としました。次に、カーブする曲面と空間の性格の関係です。建築では、窓であるとか、ガラスで向こう側の自然や社会とつながる部分を開口部とまとめています。スーパースケールの開口で、なおかつ、緩くカーブしている、この様なスクリーンは、私達が建築の中ではなく、原っぱであるとか、あるいは、山の斜面に腰を下ろして、風景を見てるような、ちょうど外部にいるのに近い性格を持っていると思います。この空間は、上に大きなシェルターがあることによって、守られていて、背中の側に、壁があると守られていながら、外向性の空間になります。これは、スーパースケールであるということにも、意図がありまして、つまり視界、だいたい人間の視界は、180度より小さく、165度位だろうと思いますけれど、人の視界より、このスクリーンが広い角度であるということが重要だと思うんです。つまり、実際は、205度ありますが、それによって、外部にいるような感じに近いんだけど、背中の壁とシェルターで防護されていることによって、落ち着いてこの空間に浸りきれます。今私は曲面による空間の可能性に関心があって、いろいろ試しているんです。ここにカーブする曲面があって、そしてこちらに透けたスクリーンがあることによって、空間が回り込む、向こう側にわずかに広がっていく、それによって誘いこまれます。建築空間を、先程お話ししました「どう見えるか」ではなく「どう感じられるか」という意識を持って作りますと、各室空間が廊下で羅列的に結ばれている、という建築はつまらないと感じるようになります。建築を空間体験として考えた時に、と

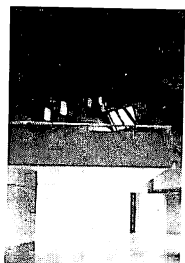


空 下呂
自然のただ中に居る様な開放性を
醸し出す大曲面開口
設計 笠嶋淑恵

でも乏しい体験だろうと思います。それに対して、くびれたり、広がったりしながら、連綿とつながってゆく空間というのは、空間体験を豊かにすることができるだろうと思います。そういう意味で、ぶつつんぶつつんと、徒に空間を切らない、ドアとか壁、そういうもので切らないで、向こうとこちらの性格を分けて構成する、或いは、分節化を計る、そういうことをここで実施しています。次に、空間の性格に周囲の地形であるとか、自然的要素の状況が空間の性格に、いかに、影響を及ぼすかについてお話します。これは、敷地全体がなだらかに下っていく斜面です、ここは三角洲のように視界が、ばあっと広がっていきます。こちらは山肌を望む。こういう所はここに建物が立っていない時に、ここに立った時は、敷地の持っている性格、解放性、あるいは、外向性と内向性が、つながってしまっているわけです。外部が持っている性格というのは、漫然と連続しているために、その違いを意識できないことが多いんです。ですから、ここに壁を一枚立てることによって、こちらの性格と向うの性格を切り離して、際立たせる、そういうことをしています。この長い、スパースケールの壁に対して、こちらは、空間の性格が外向性で、向うは内向性、あるいは、秘めやかです。心理的にも、体ものびのびと伸びていく、そういう解放性を外側の自然の性格をとりこんで生み出します。建築の側にとりこんでしまう。これも、その壁なんです。この階段も、この周囲の自然が持っている性格や、大きさを、体感することを計っています。ここから、こういう風に巡ってきて、外部の空間の性格をこの踊り場で一度体感してから建築に入っていく、というアプローチです。レジメにもかきましたけれども、建築を「見る対象」というよりは「経験する、心と体で体験する空間体験」だと考えますと、それを知覚する側、知覚者を自由な状態におきながら体験を仕組むという風に考えた時には、意識の方向付けをして、行為が拡散する。例えていうと、そういうことかと思えます。つまり、行為を指定したり、強制したりしないで、多様な展開を保障しながら、建築空間全体を巡る方向付けを、要点でしたいと考えています。先程の壁によって、外向性と内向性を分けながら、同時に方向性も暗示する。そして、階段の位置とか廊下によって、つまり、方向付けをし、次に行為の拡散が起こり、それらに、光も関わらせます。建築は「凍れる音楽」という例えがありますが、言ってみれば、一連の音楽のように創られます。こういう階段があって、空間が切られていない、ただ暑さ寒さがありますので、引戸などの開閉で対応可能にして、この建物では空間が連綿とつながっています。これは多目的にコンサートなどのイベントをする空間ですから、ここが意識の焦点になる壁、ここに演者がいて、観客がぐるっと車座になって、それを鑑賞するという使われ方を、私は構想していたんですが、オーナーは、ここを舞台にしてこういう風に使ったりしています。それは自由でいいんです。そこで表現活動が起こる時には、背景となる壁が必要だと思っています。この背景となる壁が重要で、舞台の額縁はなくても、壁があるだけで舞台のような性格はかもし



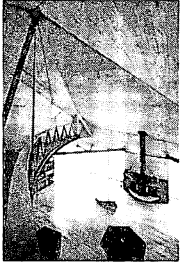
紀重 デッキ廻り
内部空間の解放性を増幅する
設計 笠嶋淑恵



紀重 多目的ホール
ひとを包容するような広がり
設計 笠嶋淑恵

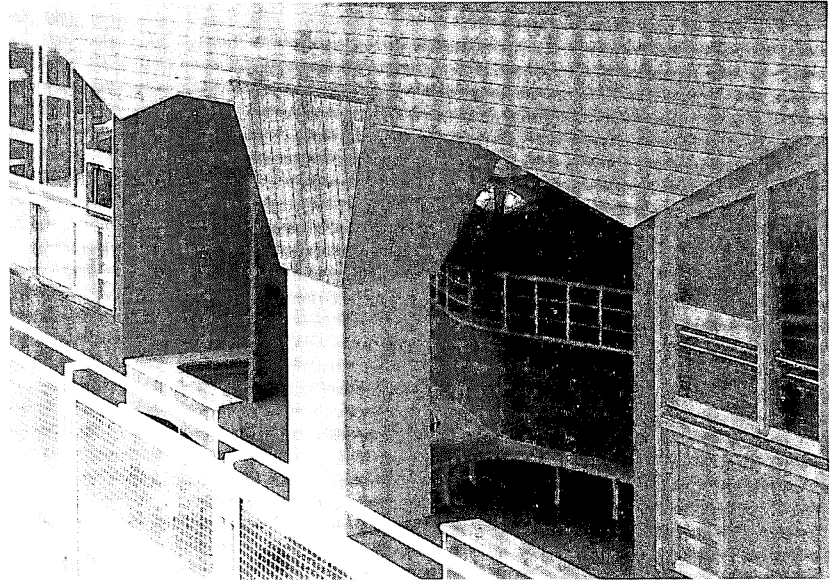
だされるだろうと思います。ここには、反対方向に伸びる2枚の壁がありまして、人の意識を外の自然の方に引き伸ばす、壁にはそういう効果もあります。これは屋根というかシェルター、その懐の中というのは内密性がとても強いですね。そこにこもるといふか、守られているといふか、大屋根の懐の中に場が浮かせてあります。構造的に工夫がされています。この建物は、コンクリート造と木造が絡み合っているために、この三角形のスペースは、下に柱がなく、キャンティースラブと言いまして、突き出しています。下のホールから見ると、浮いている床です。空間を巡って、のぼってくるところで浮遊感、浮いている感じがするだろうと思います。浮いていながら、内向的な雰囲気です。こちらは山肌を望む、丁度半地下の様な状況の部屋になりますので、ここは内密な一人で籠もるといふような空間です。これは、バシュラル風に言うと、垂直方向の内密性ということになります。この建物は、敷地が緩い傾斜地だったものですから、バシュラルが言っているところの、垂直方向の内密性、すなわち、地中に潜っていくような奥と、上昇していく奥と、水平方向、4つの開放性と(外向性)内向性、性格の違いを周囲の自然の状況を取り込みつつ、明快に作り分けることができる敷地と言うことができます。講義室に求められる諸々の性格の付与策の典型としても、見ていただけたと思います。これは階段です。階段は外向性、解放性の空間を立体的に体感する効果的な装置であると言えます。空間の性格を、立体的に感じとるための格好の場所です。これは、先ほどいいました人が落ちつける、ある精神状態に浸れる、内向する意識に浸れるために、大きな壁が不可欠だろうと思います。なおかつ、ここに外向性が生まれるために、スーパースケールの開口があってはじめて、人が集ってきて交わるのにふさわしい空間の性格が生まれるんです。その中で、様々な違いをもつ人々を許容するためには、中にいくつかのコーナーがあって、各々異なる性格を出している、ということが必要だろうと思います。先ほどの「方向付け→行為の拡散」という言い方を当てはめてみますと、ここである方向付けがされて、ここで行為の拡散があり、方向付けがあって、行為の拡散があり、こちらにも方向付けがあって、行為の拡散があります。その時に、壁はたいへん重要です。この実例で意識していただきたいのは、伸びていく壁です。これは方向付けをしているのです。豊かな建築というのは、そこで多様な行為が生まれる、その可能性を仕掛ける、という考えに基づいて設計しています。あそこに壁がない場合には、この場所は落ち着かない、すっぽぬけた、意識が散漫な場所になってしまいます。これも解放性、外向性の空間なんですけど、やはり、この壁の存在が重要で、これを私は背骨の壁と言っています。ここから、この空間を一度体感できます、空間を体感する場合に一気に昇っていく階段よりも、こういう折り返して、あがっていく階段は、音楽に例えれば、スタッカートがきいている。独特のリズムを、人の動きの中に作り出す事ができます。ここに最初の壁があって、ここに、もうひとつの壁があることによって、この空間が落ちつける空間

になります。建築の原型の1つに、コートハウス(中庭型住宅)というのがあります。この南山短大にも中庭がありますね。これも守られた外部空間なんです。南山短大の中庭は、かなりのスペースがあるのでいいんですが、これを小さなスケールでやりますと窮屈です。つまり周囲に伸びやかな自然がある時にはここまで囲わなくてもいい場合があります。で、どこまで囲ったら落ちつけて、どこまでは解放したらいいのかという、解放と閉鎖の具合を考えたいんです。結局、この二枚の壁でゆるやかに閉じて、後は自然の側に委ねてもいいんじゃないかと考えました。これが一枚目の壁です。家の中のパブリックな部分と、プライベートな部分を隔てる壁です。この家は、クリスチャンの家で、ここで宗教的な集会やパーティーもされるので、この壁によって、向こう側にあるプライベートな部分と、こちらを分けています。そこで、プライベートゾーンとパブリックゾーンを固く切るのではなくて、必要最少限の壁で切っています。これは、先ほど言いましたような内密性が、垂直方向の内密性、上昇したその奥、ここから最初の場所が見下ろせます。これを建築では、トポロジカルな空間と言います。一巡りして、実際にたどってきたのは、言ってみれば点的な経験なんですけれども、ここでぐるっと全体がつながる。一連の大きな空間体験として、意識され、その人の心に残るでしょう。この奥まで巡ってきてはじめて、空間のからくりの謎が解ける様に全体像が結ばれるだろうと思います。これも一つ前にお見せした建物も、周りの風景はどこにでもあるような風景、濃尾平野のど真ん中の、のっぺりと広がる場所です。ということは、取り立てて言う程の特徴のない外部空間という受け取られ方もしかねないところなんですけれども、のっぺりと広がっている、その伸びやかさを生かして、緩やかな境界をつくりながら性格付けをすると良い場所だろうと思います。こちらはもう少し周囲の状況に個有の性格がある、独特な外部空間があって、こちらには山肌があります、山肌を望む所というのは内密な空間がつくれます。一方こちら側は、意識が外向する空間ができます。ですから、建物をこちらに開き、向こうは絞って、山側を望む。この建物は、周囲の状況が山側と谷側とで違うために、当然ちがう性格を目指します。この様に周囲の自然や景観が持っている性格を利用します。この窓は、意識を斜め上に向かわせる窓です。崇高なものを暗示します。この空間はここを巡っていただくとよくわかるんですけど、浮遊感があって、ちょうど船の上に、乗って、海面が視界に入らないような状況の浮遊感に似た性格です。このカーブしたスクリーンは同じような意味があって、実際の視界をより広げる、そういう効果があるだろうと思います。浮遊感というのは、向こう側がだらだらと緩やかにさがっているような地形ですと、床を1メートル上げただけでも生まれます。浮遊感は、少し日常と違う、日常から非日常に意識がワープする、そういう感じがします。この建物の主空間です。空間の性格としては、解放性、外向性、ただし、その中に、こういう空間を小さく見せる、天井の低い部分が持っている内向性、これを私は、人のより



2つの空 セミナーホール
崇高なるものを暗示する垂直
方向に上昇する抜け
ひとを包容するような広がり
設計 笠嶋淑恵

どころと言ったりしています。大きな空間が、単一の性格しか持っていないというのは、実は落ち着くことができないだろうと思います。また、大きな空間の中に、小さなよりどころを持っていることによって、解放性も際立ちます。そして更に、コーナー、隅、バシュラールは片隅と言っていますけれども、片隅が明快になる、際立つという相乗効果が起こってきます。屋根の一方を高く上げることによって、ゴシック教会の様に、空間を垂直に引き伸ばしているわけです。強調して、すうっと縦長の断面にしています。上の方へ意識を向けることによって、崇高な性格が暗示されます。このホールは、単純な正方形の空間ですけれども、この中に、いくつかの性格を孕ませています。このロフトには、懐の内の浮遊感があります。この場所と、下のホールとの間に生まれる距離感によって、この空間のボリュームを体感する事ができます。ここは、対角線を強調しているために、正方形の空間とは感じとられないだろうと思います。この空間は、南山大学の新講義棟の多目的大教室の参考になると思います。目的空間に対して非目的空間、つまり、ここで何か特定の行為をするわけではない場所ですが、廊下はとても重要です。単に部屋と部屋を連結する以上の効果を生み出せると思います。この階段は、上に明るい外部(ルーフデッキ)があることによって、上に向かう方向性を強めることをねらっています。一方こちらは、明るさが少ない、薄暗いところに向かってゆく、つまり潜っていく、と感じることができます。つまり同じ階段でも、性格を変えることによって、異なる空間体験が引き出されます。正方形でなおかつ、天井が水平という空間は無性格な空間です。それに対して無意識にかすめる、まともに見るんじゃないけれど何か感じる、そういう意味で、天井の形態は重要だと思います。ですから、この空間では空間に性格をかもし出す策として、天井の一方を高くもち上げ大きく傾け、頂部から光が落ちることによって崇高性をかもし出しています。天井は、空間の性格付けに、大変柔らかく影響を及ぼします。ここは袋のような空間です。先の南山大学の新講義棟の多目的小教室でねらった空間の性格です。独特な性格を持っていて、最も内密で、何かそこに吸い込まれるようでもあるし、片隅、すみっこが持っている、たぶん、私が思うに、人が最初に身を守った場所が洞穴であったりしますから、守られるという性格を感じる。それが影響していると思います。ですから、隅を意識化しますと、その空間自体が親密になっていくという効果までであると思います。上の廊下と下の廊下を比べていただくと性格の違いが分かるかと思います。こういう廊下に対して、アルコーブがあります、そのアルコーブも、この柱があることによって、よりくぼみが意識されやすい。このスペースがあることによって、への字型に連続する廊下が、外部空間を囲い込んだり、向こうとこちらの人の間に何か関係が生まれます。ここは、新講義棟の廊下中央部のアルコーブとして提案した場と共通する性格です。南山短期大学人間関係研究センターの紀要にありましたように大学は学習研究共同体です。保育園も共同体です。共同体には、意識の中の共



やまさと保育園 アルコーブ
中間領域のひとの拠り所

設計 笠嶋淑恵

共同体というのがあると思います。具体的な行為を共にするとか、強く縛る、そういう共同体ではなくて、なんとなく意識の中で、一つの共同体に所属していると感じさせるような。廊下が回り込むことによって、この子とこの子の間で何か同じ共同体に帰属してるよ、という意識が芽生えやすい。そういう意味で、廊下とか道には何か人に語りかけるような場、意識にひっかかる仕掛けが必要だと思います。ここを登る時に意識しないで登ってしまうのではなくて、意識しながら登ることによって、変位をしっかりと感じる。小高い丘に登ることを連想するかもしれません。この手すりを折っていることによって、移行することや、場のつながりが意識化されます、これらは、どれもファンタジーが引き出されるきっかけを提供するでしょう。これは、最初のゲーテアナムの案内版の効果と共通しています。天井はとても重要です。まともに見るわけではないけれども、空間の性格に影響しています。建築を構想することは、ひとの無意識に仕掛けるというところがあるんです。これは2クラス共有の玄関ポーチです。この様に一方が低くて、一方が高いのは、空間の流れ、方向性をつくる効果があります。ですからこちらへすっと上げてるわけですね。そうすることによって、二つの方向に分かれていく方向性を暗示します。柱に壁などがくっついてしまうと、柱の効果が弱まってしまいます。古い民家には大黒柱というのがあります。大黒柱は壁や建具がついてない独立して立っている時に、より大黒柱としての、頼れる存在、よりどころ、その性格が際立ちます。ここで前半のスライドが終わりました。何か質問がありましたらどうぞ。

グラバア：

途中でバシュラールという人名が出ましたが。

笠嶋：

いえ、この人は建築の領域ではなく、詩人哲学者です。ですからご存じの方も多いかとおもったんですが、ガストン・バシュラールという人ですが、人間関係学には関係ないですか？哲学者で詩人でもある。バシュラールは、例えば、水とか光とひとの想像力に関する著書もあるようです。「空間の詩学」は、私達大学生のころは重要な本だったんですよ。ところが最近学生に、バシュラールの「空間の詩学」は建築家必読の書だと言ったんです。そしたら、これはもう廃刊になってるんだそうです。建築の空間と人の描くイメージとのかかわり合い、メタファー(暗喩)についてさすがに詩人は、科学者の見方と違いますよね。それでいて、バシュラールはたぶん心理学者でもあると思うんですけど、それを科学的に分析しているので、興味深いです。バシュラールの興味深い言葉をご紹介します。「大都市の家には鉛直性の内密な価値がないうえに、さらに宇宙性が欠けている。」といってるんですね。大都市の家と言うのは、たぶんアパートとかあるいは典型的なオフィスだろうと思われそうですが、そういうところには、廊下で、目的空間が、羅列的にぶらさがっている。言い替えると、水平方向の性格の差違はあるが、鉛直方向には無性格な空間。鉛直方向の、人の動きに伴って、空間の性格が微妙に変わっていく、ということまで、感じとって欲しいと考えながら私は空間を設計するわけです。そういう人の変位に伴って空間がすこしづつ性格を変える様子、屋根裏部屋と地下室の内密性の違いにも、バシュラールは言及しているわけです。バシュラールは、夢を育む場であるから家は重要なんだ、とも言ってるんです。夢を育むということは、自分自身の内面に浸りきれぬ空間を持っているか、いないか、この様な空間体験を持ちながら育った人とそうじゃない人の違いが、想像力、内面的な能力を、豊かに持っているか、いないか、そういう差が生まれる、とういうことを言っているとおもいます。家は、建築の原型であるわけですから、そこで空間体験を、さまざまな空間が持っている違いを、感じとりながら成長したのか、そうじゃないのかということは、人格形成のうえでもとても重要だということも言えてくると思います。現代の家は個有の性格が薄まっていますから、先の言葉の意味するところは、ますます重要になると思います。欧米では、「家が人格を作る」というような言い方もあるようです。それは、私が思うに、外向的な空間は、人の包容力、器量の大きさ、そういうものに関わるように思うんです。つまり、家自体が様々なものを受け入れるような要素を持っているのか持っていないのか、それからさらに、その浸りきれぬような内密性とか神秘性とか、そういうものが人の想像力を育む。神秘的な部分、例えば、民家のようなものは持ってますよね。ああいうものは、垂直方向の内密性とそれから水平方向の性格の違いと、少なくとも、四つか五つの典型的な空間の性格は持っているんで、そういう環境を子どもの頃から持ってた人というのは、こういう気分の際はあそこで過ごすとかですね、そういう空間を楽しむ能力も育まれる

と思います。たぶんその中でも、今一番問題なのが、内向できる場所を持っていないことではないかと私は感じます。何か質問があったらどうぞ。

中野：

ゲーテアヌム、あの最初のあれで、なたでけずったみたいだね、同じように、天井の水平、垂直を意図的に取らずに、三角形のいろんな形に組み合わせて、何かやっているようにおみうけたんですが、空間の感覚がだいぶ違うのがよく分かります。ああいうのはどの角度に、例えば左側の線だったら、何度の角度、右側だったら、何度の角度というのは設計される時に、やっぱり何度も作ってみるんですか？

笠嶋：

図面を書いたり、立体的な絵を書いたり、模型をつくってスタディーをします。シュタイナーは模型を自分でつくったようです。ある程度経験を積んできますと、断面図を書くだけで、だいたい全体の形はこうなるだろうと、把かむことができます。先ほどの折れた面でドームにちかいものを作ってるということの意図は、空間の性格の意識化に関わる重要な部分があると思いますので、整形のドームと非整形のドームについて、少しお話しをさせていただきます。例えば、バロックの教会で、楕円形が使われているものがあるんですけども、楕円形というのは動きをはらむ性格を持っています。一方円は、動きというよりは中心に向かう性格、求心性が強いんです。楕円は二つの中心を持っているので空間が動きをはらむんですね。ゴシックからバロックに移った時に空間に動きを求める意志が生まれました。ぬるっとした、こてで、整形のドームを作るのと、先程の山里保育園の天井では、いくつかの面を折ってドームの様な形態を造っている、いわば不整形のドームの違いについては、さんざん考えたんです。ちょうどコンパスで書いた円と、人間の手でフリーハンドで書いた円の違いです。フリーハンドで書いた少し稚拙な円、実は、もっといろんなグレードがあって、書き慣れている画家とか建築家、そういう研鑽をつんだ腕が書いたフリーハンドの円と、コンパスで引いた円との違い。手作りのものと、機械で作ったものとの違いと、私は同じことが言えると思います。ぬるっとつくってしまうと、正確なドームができるんですけども、宇宙を暗示し、様々なひとを包容するというドームの性格に気づかれない、単に「美しい天井だなあ」という印象で終わってしまいます。ドームを構想した建築家の思いに気づかないで終わってしまう可能性が高い。目を向けるきっかけとしてはどちらが効果があるのかと考えた時に、いくつもの面で構成した非整形の方が意識化されやすいと思ったわけです。

角度についてはかなりの計算をしています。つまり、このぐらいの角度にすれば、こんな感じであろうとか、屋根や天井の傾き具合とひとに与える印象については試行錯誤しています。最初の方でお見せした二枚の壁が突きでている濃尾平野の家は、一見普通の屋根に見えるだろうと思いますが、寄棟屋根の、

四面の傾きが各々違うんです。普通は同じ傾きなんです。一般的な寄棟屋根は、棟の位置をずらしたりしているんですよ。それをすると屋根の形と天井の形が対応していない、形態上のうそになりますよね。ですから、それをしないために、各面の傾きを変えたのですが、道と庭側が緩く、そして北と西の勾配が急になって、内部の空間とも具合良くいっているんです。屋根や天井の傾きは、内部空間に影響を及ぼします。

次のスライドは、山里保育園の主空間です、真ん中にこういう木が張られていない部分を作ってみましたのは、上に抜ける感じが出てくると思うんです。それは、宇宙的なものを暗示しています。それによって、上の方に意識が向きます、天井を全部木で張ってしまいますと、しっかり閉ざされてしまいます。こういう袋のような空間も同じく大きい空間も、つまり、みんなで集う空間と、こもる空間が、完全に切れた形でなく、くびれてつながっている、こういうあり方が重要だと思います。このこもる空間から、皆のいる大きな空間を見る、つまり、一人でこもるタイプの子もいるはずなんですね。そういう子っていうのは、観察しているわけなんです。その子にとって、その状況は大事なんです。その時に完全に閉ざされて、こもっているのか、何か向こうで、交わっているのをちらちら感じながらこもっているのか、完全分離しないことが重要かと思えます。この大きい部屋と小さい部屋、そして垂直方向の内密性を作る為に、小さい部屋の中に中二階を作っています。そこからこちらが見おろせる状況です。これが小さい部屋なんです。保育園の子どもは、大きい子でも1メートル20センチより少し低いくらいなので、ここの天井の高さは1メートル



やまさと保育園 保育室

宇宙を暗示する天井の抜け

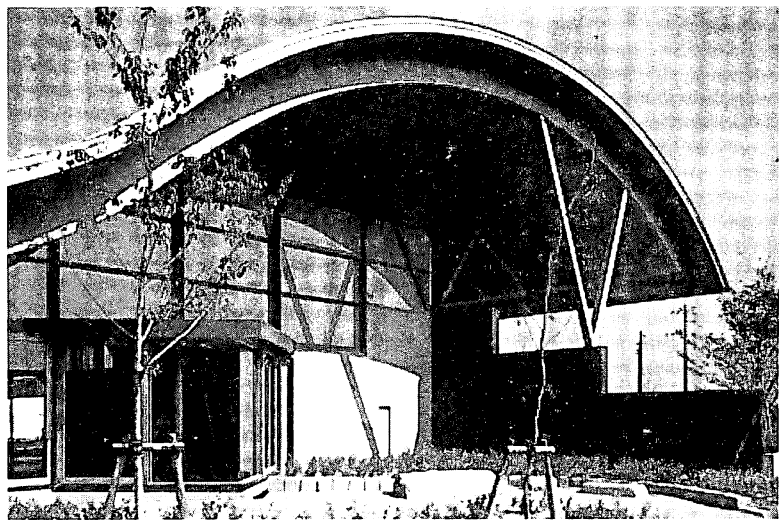
柔らかくひとを守るような

折れ曲がるいくつもの面による天井の周縁部

設計 笠嶋淑恵

20センチしかありません。これは、現実には作って見たら、茶室みたいだということで、大人は大人で結構喜んでます。これは、鉛直方向の奥、すなわち内密性、小さい部屋の上の屋根裏部屋の様な空間なんです、ここから手すりを介して大きい部屋が、ちらちらと、望めるようになってます。これも、人の流れに対するよどみになります。小さい部屋からこういう風に見る時に、額縁効果といいます、こう、視界を絞って見ることによって、こもっているということが際立ってきます。

これは、先程の大府市のいきいきプラザというコミュニティーセンターなんです。ここは、高齢者をサポートするまちです、高齢者が孤立して住むのではなくて、地域の中に高齢者世帯が独立してあったり、あるいは、同居住宅があったり、近居と言って親世帯と子世帯が近くに住んだり、その他に、高齢者対応の集合住宅もあります、戸建住宅もあるという高齢者をサポートする21世紀のモデルとしての住宅地を作ろうという愛知県の居住環境整備事業の核施設です。ここでは木造で大空間を造ることができる大断面集成材による架構を採用しています。これは、日本で初めて作ったS字型の大断面集成材です。なぜS字にしたかと言いますと、内部に大きなふくらみを作りながら、道に向けては、すうっと迎え入れるという性格を作りたいと考えたからです。そして、壁は、人の寄り所になる性格を作ります、更に外部に向かって意識が伸びていきます。この二つの役割を持っています。これは、こちらにいきいきプラザという地域集会所がありまして、となりにデイサービスセンターがあります。デイサービスセンターは、従来は、老人ホームに併設されているのが一般的だったんですが、これは単独で、なおかつ、住宅地の中に造られた愛知県下での第一号施設です。この設計に当たりコミュニティー建築というのはどうあるべきだろう、

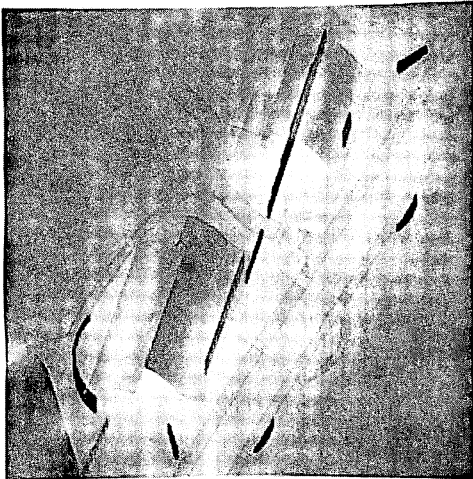


空を孕む波…大府市いきいきプラザ
コミュニティーを仕掛ける大きな軒下空間 設計 笠嶋淑恵

ということを考えました。大屋根の両端を道に解放した大きな軒下空間、目的ではない空間、道に対して解放されていることによって、こういう施設に対して敷居が高いと感じる人々も、来やすい施設として考えたものです。いの一番に参加するタイプと、少し気後れするタイプの人と、様々いるだろうと思いますが、人を招き入れるような、散歩の時にちらっと覗いたとかですね、そういう関わり方をなんとか引き出したいなと考えまして、かなり大きな軒下空間を、道、すなわち地域社会に解放しています。こちらに道路があります。道路から中がほとんどまる見えになっているんです。先ほどの赤い壁のこちら側を、動的な行為をする動ゾーン。そして反対側には緑地がありますけれども、その緑地側を静かなゾーン、静ゾーンとしたんです。空間の性格を意識しながら建築を組み立てる時には、むしろ大まかな性格分けをしています。つまり道に対して解放性、大きなシェルターが架かっていて、道行く人からは中で何をやっているかよく見えることによって誘い込める。そういう作り方をしています。そして、ここは緩やかな起伏がありまして、前面道路がちょうど車椅子の屋外用のスロープの国際基準と同じ上限勾配の、5%勾配なんです。ですからスロープを一切つけないで外部の地盤高と入り口がちょうどすりつくところを玄関にしているわけです。これによってスロープがなくても、車椅子の人は自由に入ってこれます。外部の地面の緩い勾配を生かして、東側では腰壁があるけれども、反対側では中の床が外部の地面の高さより下がっているんです。そうするとそれだけでも、内部と外部の間に、見え方の違いが生まれてきてまして、床が下がっている方が少し落ち着くコーナーになるんです。こういう斜め柱は構造上たいへん合理的なんです。木造の建物には地震に耐えるために斜めに筋交が入っているんです。斜め柱は、筋交と柱を兼ねているのです。これは架構美、架構のおもしろみです。これは建物に、動きを生み出す効果もあります。直線状の歩道とは、差違をつける為に、自由な散策ルートとして、人の流れが蛇行するように植栽しています。ここは夜の10時まで開いていますので、この地域の照明、大きな行燈の様な存在です。この床が下がっている落ち着く場は、この軒下空間に対して三角形の、でっぱりにしています。ここが動的なゾーンで、スポーツをしたり、あるいはダンスの講習をしたりするような動きを伴う行為の場、小さな体育館の様な、それから集会もする部屋なので、三角形のでっぱりの部分は休憩コーナーです。ここで休憩している人と、散策ルートを歩いている、あるいは、通り過ぎる人との間に、何かこう、コミュニケーションが発生するだろうというもくろみです。三角形のでっぱりに加えて、外部に伸ばしたこの壁があることは重要です。落ち着いた雰囲気作りの為に、この壁は緩やかにカーブしています。曲面の内側は、ゆるやかな内向性を醸し出すと思います。この階段ですが、階段を昇っていく人と、下のホールにいる人との間で、交わりが生まれる様に、踊り場が少し広がっています。それによって踊り場に立った時に、このホールを見返し、見おろす、ということが誘発される

と、期待している場所です。屋根がこの施設を大きくカバーするように、ホールと動ゾーンの中に、大きく掛け渡されています。一つの共同体の中に共にいる、という意識が培われていくように、いくつかの目的空間を大きなシェルターで包み込んでいます。天井際を透明ガラスにして空間の相互貫通性、連続性を保っています。天井の形態はとても重要で、まあ大きくかかっているということは、空間に包容力を作りながら、いろんな人を迎え入れるという意識が、醸しだされるであろうと考えています。外部空間にまで連続して架かっています。これによって外部空間の中に、寄り所をつくれます。ここは大府東高校の生徒達の通学路なんですけれども、彼らが寄り道していきます。それから散歩をしている人も、時々、軒下空間から動ゾーンを覗いたりしていますので、効果があったであろうと思っています。こちらは、歩行者専用路なんです。歩行者専用路を歩く人にこんなふうに見えて欲しいということを計りながら計画しています。これは全体計画図です。このいきいきタウンに住む高齢者、例えば高齢者だけの世帯、高齢者夫婦の世帯、それから同居してる世帯、近くに住んでいるという人まで様々な関わり方ができる様に仕掛けてあります。これがいきいきプラザという地域集会所です。こういうカーブした壁や屋根は、人の生命感と連動する、関わりとを考えています。うずまきというのは、人が古代から使っている文様です。これは生命のリズムと関係していると言われています。そういう意味で、波形というのは、生命感と共振するようになります。ここでは同時に、ジョギングルートも計画してまして、そのルートと建築は、密接な関わりを持たせています。ここで重要なことは道路に対して15度振っていることです。このスペースが同じ幅で続くのではなくて、ここで溜まりを作り、

すぼまり、溜まりを作ってはすぼまるというように、作っているリニアな公園の様な散策の為の道です。これはキャンパスでも、重要なことかなと思います。南山大学には大きなすりばち状の庭がありますね。あれはとても良い外部空間だと思います。道に対して袋のように、大きな空地があったり、小さな袋状の場があったり、ということをする、人の寄り所としてとても魅力的な外部空間になるだろうと思います。これは今のコンセプトを表している絵です、この道に対して15度振ったところに、赤い壁が切れながらつながってまして、こういう所に人の溜まり、すぼまり、人の溜まり、すぼまり、というふうにくびれながら連続しています。これは、模型です。これをリニアオープンスペースと命名したんです。公共建築を作る時に、道路に対して無性格な空地を作るのではなくて、そこに人が溜まれるような仕掛を作っていきたいと思いま



屋根 壁 空

…大府市いきいきタウン核施設

空を孕む波

地に還る波の計画コンセプト図

設計 笠嶋淑恵

す。このことは、外部空間、更には内部空間の廊下などにも当てはまると考えています。こういう風に石をサークル状に置いて、かん木の植栽で囲い込むようにしています。三種類の大きさの石を用意しまして、三人くらいが掛けられる石と、二人くらいが掛けられる石と、一人が座るスツールの様な物を組み合わせて構成しています。ベンチが直線状に横に並べてあると、対話が発生しにくいからです、こういうサークル状に置くようにしています。この2棟の建物は、前面道路に対して15度振って建ててあります。なぜそうするかと言いますと、建築を立体的に見せる効果があります。こうでないと正面だけ見ること、つまり、建築を一つの面だけで知覚することになってしまいます。車でこの前を通り過ぎるだけの人にとっても、あれあんなところに何が出来たのかなという風に意識化されやすい。二つの建物が関連ある建物かな、という風に感じられるように配置してあります。先ほどお話ししました、元の地形の緩い起伏ですが、部分的にこういう風にこちら側を少し落として、意図的に、落差をつくることによって、外部空間に、サンクンガーデンと浮遊する庭と、二種類作っています。それはこの写真で見るとよりもっと、落ち着くすりばち状の囲われた庭がこういう風に歩行者専用路から庭の様子がちらちら見えます。このことによって、この施設が身近なものになっていくだろうと考えます。階段はとても重要です。この建物は一階にデイサービスセンター、二階が家庭介護支援センターになっています。ヘルパーさんが朝集まってここから出ていく拠点になっています。そういう方達も含めてスタッフが、利用者と、頻りに顔を合わせるように計画しています。階段と廊下の関係が、人の動きが相互に見えるように、人一人コミュニケーションを仕掛けています。こういうふうには階段を昇りながら、施設内のスタッフの様子が感じられます。事務室も囲い込まないで、カウンターがオープンで、その奥に袋状に作っているんです。つまりスタッフが部屋の中に籠もりきってしまうということがないように、利用者がどこを歩いても、スタッフの姿が目に入る、そういうことを意識して、廊下、階段廻りを設計しています。この廊下は向こうがすぼまって、だんだん狭くしてあります。この建物は、愛知県の第一号の単独型デイサービスセンターということで、いろいろ新しい方法を試しています。日常動作訓練室と休養室、ここの利用者がほとんどの時間を過ごす場所です。企画者からのご希望で、これをワンルームにしているんです。そうならば単純なワンルームではなく、少し気分が内向する時に、籠もる場所や、交わる場所という、性格分けはしたいと思ひまして、廊下側、つまり奥で、天井を少し低くし、開口部側は、高くしています。天井の高低と、壁のくびれによって、真ん中の大きな空間に対して、両側にサブの空間がくっついている、そういう構成です。こちら側の休養室は竣工当初は、この様にベットの置いていましたけれども、現在は、数を半分位に減らして、なるべく車椅子で過ごしていただく方針をとっておられます。こちらの廊下側に壁があって、向い側に開口があって、庭に接していますから、天井はこちら

を低めにして、庭の方に向かって高くしてあります。それによって、壁の方に緩やかな内向性が、向こう側に向けて外向性が生まれます。反対側の休養室の畳のコーナーです。ここが内向空間、壁側なんですけれども、家族が高齢者に付き添って、一緒に来られたりした時には、ここでお茶が飲める、喫茶コーナーなんです。給食サービスの配膳もここでします。ここは、エントランスホールの側でアルコーブのコーナーがあったと思いますが、あのカーブがこちらに出張っています。ですからこちらが壁が多くなり落ち着きます。これはお風呂の入り口なんです。廊下に対して必ずくぼみをとって部屋に入ることを原則化しています。このくぼみは、三角形なんです。スペースが小さくできますし、廊下からの流れをスムーズに受けることができます。お風呂も気分的にゆったりと入っていただきたいので、これは涼みコーナー、湯上がりにくつろぐコーナーをここに、袋状に造っています。先ほど、こういう壁がちょっと出ているだけでも、アルコーブができると、お話ししましたが、これも同様の方法です。ここでは、大きい方の浴槽のもたれる壁を、一人一人の背中の形に対応させて、3つのカーブにしています。みんなで入るお風呂でも、個別性を出したいと考えたものです。

これは大阪芸術大学です。今回の研究会のために最近作られている大学を建築専門誌で調べてみたんです。私は、大阪芸術大学に非常勤で行っているんですが、ひいき目にみるわけではなく、大阪芸術大学はだんとうつにいいと思います。立正大学熊谷新校舎がいいと以前にお話ししたんですが、大阪芸術大学はより多様に展開されていて、両方写真をお見せします。大阪芸術大学は1964年公開設計競技の最優秀案として実施され、1965年着工の建築なん



大阪芸術大学 校舎を結ぶブリッジ
キャンパス全体及び周囲の風景まで展望できる場
コミュニティーを仕掛ける場

設計 第一工房

ですが、現在まで、13期にわたって、順次作りながら、キャンパスを構成していったという経過をたどっています。日本の建築界の第一人者高橋誠一率いる第一工房の設計です。その間コンペ案を見直し、煮詰めながら作っていったということが、とてもよかったのではないかと思います。したがって建築も少しづつ変更されています。今出していただいた写真は、これは無用の用といった空間なんです。つまり、二棟の講義棟がありまして、それを結んでいる、ブリッジなんです。つまり、渡り廊下というよりも、橋みたいなんです。で、この橋を踊り場で接続して通したり、上の階で通したりしています。ですから半階ずれた人と人の間で、何かやりとりができ、コミュニケーションのきっかけが生まれるようになっていきます。建築の空間として、とても若々しい空間だと思います。つまり作り過ぎたりしない、洗練されていなくて、荒削りな魅力、こんな風にしたら、こういう人と人の関係が生まれる、という建築上の実験が、若者のための空間になっています。大阪芸術大学は創始者が、とても意識の高い方だったようですね。何かこの方自身はとても不幸な生い立ちで、自分自身がとても恵まれてなかったので、同じ様な境遇の人に、役立ちたいということで、まず孤児院に近いものから作られて、次に幼稚園を作って、芸術系の専門学校を作って、その後、この大阪芸術大学を作った、というステップを辿られたようです。ですから思いの強さが違うのかなという気がします。というのは、こういう創意や実験に満ちた建築はなかなか作らせてもらえないんですよね。これは教育界では初めての公開設計競技だそうです。私は、大阪芸術大学で、この場所が一番好きなんです。というのが、この下をちょうどキャンパスのメインストリートが走ってまして、もっと先に伸びてるんです。撮影アングルの都合で少しブリッジの規模が小さく見えますけど、よくこんなもの作ったね、というような、機能を超越する長いブリッジなんです。で、それが、キャンパスの主軸に対して、交差するように建ってまして、それこそ、キャンパス全体を眺め渡せるブリッジなんです。キャンパス全体は、小高い所にちょうど山岳都市をモデルにして、計画されたようで、このブリッジからは、キャンパスの更に向こうの方に、小高い丘が遠望できるんです。この辺り、聖徳太子が生まれた歴史的な場所で、飛鳥時代の古墳群がいっぱいあるようなところです。

これは66年ですから、だいぶ前なので、もうちょっといいキャンパスがその後出来てるだろうと思って調べてみたんですけど、むしろお金がかかってテーマパーク化しているように感じました。骨格として優れた建築、例えば、学生のように若い人にとっても、それから教員にとっても、刺激的な空間というか、いろんな交流や体験ができるようなキャンパスというのは、見当たらなかったんですね。建築は、目的空間を、先程来お話ししているような空間の性格、で作っていくという方法がまずあって、それらを、外部空間であるとか、広場であるとか、それから廊下であるとか、非目的空間でネットワークしています。この立正大学熊谷新校舎は楨文彦の設計です。あの名古屋大学の豊田講

堂を設計された方です。日本の建築界の第一人者です、豊田講堂と似ている部分があります。この方ハーバード大学でも教鞭をとられた経験がある方ですから、アメリカの大学も、十分ご存じだろうと思います。

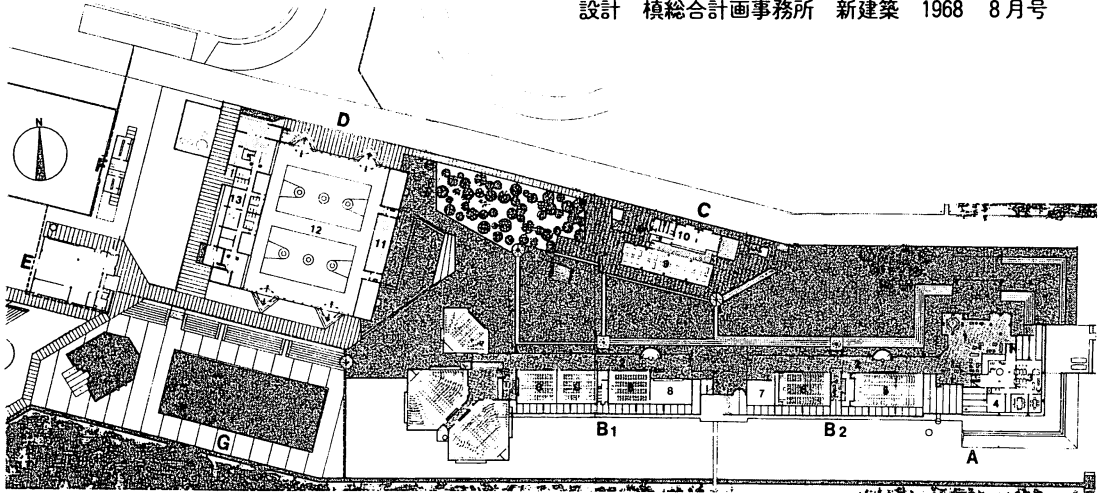
グラバア：

私は熊谷出身で立正大学は知っていましたが、残念ながら行ったことはありません。

笠嶋：

図-1 立正大学熊谷校舎全体計画図

設計 槇総合計画事務所 新建築 1968 8月号



立正大学は、道に対して平行にプラザがありますよね。二棟の建築でゆるやかにプラザを囲っています。これはキャンパス計画として、建築家の間では当時話題になった校舎なんです。特に不特定多数の為の場所、彼らは不特定目的空間と言ってるんですけども、大きな講義室の前に大きなホールがあって、廊下と、ホールが交互にあるという作り方です。更にそのホールを上から見おろせるという、原型的な作り方です。このリニアなプラザの端に丁度屋外の舞台になるような段もある様です。それを私達は建築的仕掛けと言ったりします。周囲の広場より2段階高いだけで、それは舞台になります。舞台として使わない時は、学生がそこでたむろして、腰掛けるだとか、学生がその時の気分でもって、いろんな使われ方も誘発する段差です。この通路がとても象徴的なんですけれども、講義室が三階建てか四階建てで、その上の方にも、ホールが積層されているように構成されています。またこのホールが少し広場に対して出っばっているために、向こうとこちらの間で、学生の視線の交換ができます。こういうキャンパスの中で、学生と教員が平面的にコミュニケーションするだけではなくて、立体的にコミュニケーションが生まれるというのが、人格が形成される時に、先生や仲間に対して憧れるとか、何か優れたものに対する憧憬の念を持つことはとても重要ではないかと思います。尊敬する先生の姿をちらっと見るとか、そういうことで親しい関係になってくるのではないかと思います。

ですから、今度じっくり見てみて下さい。だから名古屋大学豊田講堂も結構おもしろいんですよ、建築的には。

では、代官山の集合住宅ご存じですか。東京の代官山に、とてもしゃれた集合住宅があります。あれも槇文彦の設計なんですけれども、この道と建築の関係、都市的な道と建築の関係で、作り過ぎずに、小さなふくらみをつくったりというような方法で、洗練された都市空間を作るのはとてもうまいです。これは、先程のホールの上のレベルか、上と下と、ですから吹き抜けを介して、立体的な上の解放廊下から下の廊下が見おろせたり、さらにそこから広場まで見渡せる。立正大学熊谷校舎は、私達がちょうど学生時代に竣工した、そのくらい古いんですね。設計者が意図したところには、もちろん人の溜まりというのは出来たけれども、小さな隙間のようなスペースとか、思いがけないところも、人の拠り所として使われたということが設計者側から報告されて、私達建築を学んでいた学生の間で話題になった建築です。それから、先程のホールで、最初、意図したところに、人の溜まりが出来なかったので、椅子の位置をちょっと変えてみたら、人の溜まりが出来たそうです。時々、管理、運営する人々によって、人の流れが生まれるところに椅子を置かれてしまうことがあるんですよ。そうではなくて、壁沿いとか、アルコーブとか、そういうところの方が拠り所になりやすい。ところが、全然違うところに置かれてあったので、位置を修正することによって、人の溜まりが出来たそうです。

又、大阪芸術大学の外部空間ですが、古い言葉で八十みちという言葉があるんですか？あの獣道みたいな、つまりこのメインストリートから様々な分かれ道があって、そしてその枝分かれした道のところに随所に溜まりを作っている。

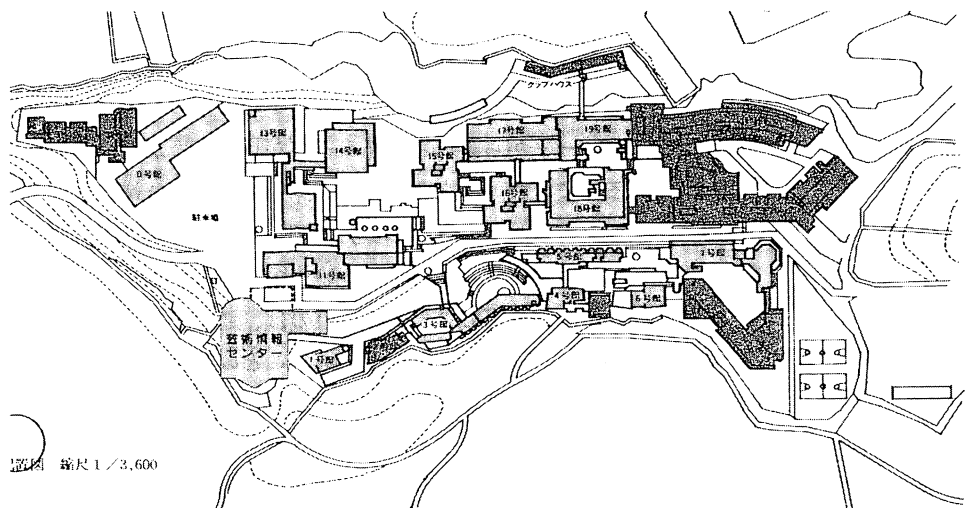


図-2 大阪芸術大学全体計画図
設計 第一工房 新建築 1978 11月号

その上に全体的に、起伏を上手に生かして計画してしましてね、外部空間は単純じゃないんです。卒業した人達も、ここで四年間過ごせたことが、私の人生の中で一番の幸福だというようなことを言う人がいるくらい、私自身も同感です。南山大学もですね、メインストリートの様に、計画されてますね。それに対してブリッジ状のピロティーがあります。あそこのリズムが一定ですよ。そういうのは建築家の性格でもあるんでしょうけれども、端正さを好む建築家ですと規則性が強くなるんですね。学生って、もう少しなんて言うんですか、型からちょっと外れたいとか、そういう自由な気分ってありますよね。そういう意味では大阪芸術大学は、芸術系の大学であるからか、変化に富んでいます。この校舎は導線計画が、スキップフロアーです。東京銀座のソニービルご存じでしょうか？ソニービルも、スキップして少しずつレベルが上がりがながら、螺旋を描いて昇っていくんです。先程の教室はそういう風になってしましてね、それで、更に、階段が絡み合っているために、廊下を兼ねた、幅の広い階段が人の溜まりになっています。そこは展示もできます。これなんかも、外部空間を使ったベストポケットパークです。こういうものが、先ほどのメインストリートに対して、袋のように、完全に切れて独立していないで、メインストリートを歩いている人が、ちらっと、今日なんかやってるなっていうことが見えてくるような。よくこころへんで、ダンスの練習をしています。この下はピロティーになってしまして、とても重要だと思うのは、吹きさらしで、雨は降り込まないものですから、いろいろな使い道があるんですね。南山短期大学の校舎の入口部もピロティーです。例えば、学生が様々な表出行為とか表現活動するのに好都合な場所が、そのメインストリートに対して、随所に、散在するものですから、演奏をしていたりとか、芝居をしていたり、芸術系の大学なので、表現するという学生側の欲求も、とても強いということもあるのかなと思います。そう言えば、愛知県芸も、私はいいキャンパスだと思います。先程の立正大学の広場の関係より多様な展開がされています。斜面を利用して袋状空間を作って、広場とつながっていたり、さらにここの上のレベル、立体的に、学生が向こうのグループからこっちのグループが見えるとか、そういう関係を随所に作っているんですね。県立芸大で興味深いのは、作り過ぎないで、伸びやかさのあるキャンパスだという点です。愛知県立芸大の設計者は、レイモンド事務所にて在籍していた吉村順三です。つい先頃亡くなりましたけれども、東京芸大の教授をされた建築家です。興味深いのは、通路から、デッサン室がまる見えになったりとか、つまり芸術大学であることの雰囲気醸し出すようにしているわけです。画家は、道端でデッサンしたりとか写生したりします。またそれを見るということも、新しく入った人には刺激だということで、随所にそういう表現活動をしている学生達がいる、そしてそれがまた、見えるということは、とても重要です、キャンパスの中にそういう雰囲気が溢れる様に計画されています。これも、先程の様な解放廊下があって、下の溜まりと見る一見られる

関係が随所にあります。これなんかもそうです。先ほどの廊下が一番ダイナミズムに富んでいます。こういう広場のど真ん中をブリッジが飛んでいるとかです。こういう、ややラフな建築の魅力ですね。講義棟も単独で建っていて、中には廊下がなく、こういう屋根のある通路だけでつながってるんですね。ですから私が思うに、これ以降の大学は、オフィスビルに近づいているのか、あるいは、内部空間化する必要がないと思われるところまで内部空間にしてしまったり、逆に内部空間にしたからつまらない、そんなことを感じます。これは、大阪芸大の中でも、記念すべき建築なので、独特な空間性が作られています。これは塚本英世という創立者を記念する記念館です。こちら辺に垂直性の要素。ここがおもしろいのは、場や空間が単独で、独立しているわけではなくて、エントランスから入ってくると、空間が流れてわずがづつ下っていくという作り方をしています。椅子として作られているわけじゃない広い段状の床で、普段の時は学生がそこで弁当を食べたり、それから、奥のホールではパイプオルガンを練習していたり。これは中部大学なんです。一部ですが同じ設計者、第一工房が設計しています。これも、こういうところが学生のたまり場、つまり、壁柱が連続していてその間が、道に対して、人の拠り所になる。先ほどのメインストリートとそれに沿うスペースなんです。2棟の建物を結ぶこのブリッジの長さは、この写真の二倍近くあります。ここに階段があって、踊り場とブリッジ、つまり空中廊下が半階ずれているということの効果について、後半の学習研究共同体としての大学ということを考える為に、少し話をまとめてみますと、目的空間というのは、それぞれの要求によって空間の性格を決定します。先ほどのやまさと保育園の内部空間のような内向性、つまり、意識をどこまで集中させたいのかというようなことと、壁の面積に対して開口部の面積の関係。それから、私自身はバシュラールが言っている、「精神はくつろぐ」、つまり、精神はゆったりと弛緩しながら、「意識は覚醒している」という、その落ちつけるという感覚、そういう空間をまず目的空間としてつくる。で、もう一方は、非目的空間というものも大学ではとても重要です。というのは、様々なコミュニケーションのきっかけというのは、そういう所にあると感じているものですから。非目的空間にこそ、多様な行為というのが、生まれる。人が、お互いに行き過ぎるだけだったり、見る－見られる、それから眺めるなんていうのも、実は重要で、こちら辺りから他者を眺める、あの子と友達になりたいとか、先生は一体どんな先生だろうとか、なんかそういうことって大事ですよ。先生の方にも、学生からそういうことを思われることも大事でしょう。このような、人間的興味を持ち合う。そういうことは、コミュニケーションの前段階。そういう中で、憧憬だとか畏敬だとか尊敬とかいう気持ちが生まれてくると思います。それこそが自己成長の為にとても重要だと思います。キャンパス計画では、目的性は特に持たない場所も、とても重要であると考えます。次に休む、とか居眠りをする、とかたたずむとか、本を読むとか、暇を潰すとか、日向ぼっこ

をすとか、ぼーっとできる場所、これも重要だと思います。その人がその共同体の中に帰属していると思えるからできるわけで、例えば私達のように、団塊の世代が、大学生だった頃というのは、かなりの人が大学に幻滅していたんですね。私自身もそうなんですけれども、大学に居場所が感じられなかった、帰属感が薄かったように思います。それは、大学の作られ方の問題だったのではないかと思います。つまり、目的的には作られているんだけど、非目的的部分が充実していない。例えば、廊下と教室しかなかったら、たぶん居場所がないと思います。そんななかで、南山大学は良いキャンパスの1つだと思います。けれども、たぶん一階まわりにしか非目的空間がないというのが、少し私にはさびしい状況ではないかなと思うんです。随所に、人の溜まりになるべき場所が、分散してあって、お天気がよかったらあそこでお弁当食べようとか、雨が降ったらあそこだとか、そのくらい自分の居場所がある大学は、帰属感、「私はここのコミュニティの一員である」と思える大学であろうと思います。この様な考えに立って、先の新学科棟の計画をつくったわけです。レジメにあげました行為のリストのなかの、居眠りをするとか、休む、心底、ここで休みたいと思える場。ここで、本を読みたいと思うことができる場、それは、学習共同体への帰属感を生む場所として、重要だろうと思います。それがないと疎外感が生まれるでしょう。これは、人の気質と関係しますから、自分にとってここが一番良い居場所だという場所が、少しづつ違う場所として用意されると望ましいということになります。出逢う、挨拶する、待つ、誘う、議論する、おしゃべりする、集まる、表現活動、私は表現活動というのは大事だと思うんです。青年期というのは、自己表現欲求が、高まっている時期だと思います。そういうことが出来る場所というのは、用意されたフリースペースということなんです。例えば、予約しないと使えないということと、広場の隅が勝手に使えるということとは違うだろうと思います。学習共同体が形成されていく為に重要なことです。こう見てきますと、いい大学だなと思うことができるキャンパスには、大学側にビジョンがあります。ビジョンというのは、社会の要求に従って、変化せざるを得ないころがありますが、私は青年期に求められている非目的空間というのは、ラフな方が使い易くて、良い。ただし微妙な違いがある場が随所にあるというあり方が良いと考えます。大阪芸術大学を撮影された写真家の方が、ここの外部空間はまさに八十みちだねって言っただけなんです。これはメインストリートがあるだけじゃなくて、そういう枝分かれした獣道のような自然発生的な道が随所にあって、学生からすると、言うなれば、私だけの居心地の良い穴場を発見しちゃった、という感じなんだと思うんです。教育理念の建築化の方法も、建築上の実験をストレートに出した場所や、粗い仕上げは、今少なくなっていて、キャンパスの計画で、テーマパーク化し過ぎているという批判もあるんです。学生におもねて、おしゃれな空間をつくるというのは、私はあまりいいと思わないんです。何かちょっとラフ

な格好では行きにくいとか、使いにくいとかね、そういう逆の抵抗が生まれる可能性とかあると思うんです。中京大学のキャンパスはその傾向を持っていると思います。山手通り沿いのギャラリーは、企画はとても良いのがあるんですね。2度ばかり行ったことがあります。小さなリニアな展示空間がある、けれども、道行く人に少しわかりにくい入りにくい感じがします。目的的になってる訳ですね。目的、非目的というのは、コミュニティー建築を作る時には、非目的であった方が、偶発的行為、多様な行為が生まれてくる。したがって、行為がふくらむ。目的的になればなるほど、行為はやせる。まあそう単純なものではないけれども、だから道に対して見る一見られる関係を作った方が良いです。

今、世界的なレベルで影響力があるレム・クールハースが、設計した美術館、クンストハル(ロッテルダム)は、車の道をまたいでいるんです。更に、人の道が貫通している、そういう美術館です。そのねらいというのは、美術に関心のなかった人も、散歩しながら、ああ美術館というところではこんなことをやっているんだとか、ああ、この美術館では今こんな展覧会をやっているんだということが、直接的に目に入ってくる、そういうことを仕掛けている美術館です。フランスの国立図書館のバーナード・チュミのコンペ案では、ジョギングトラックを、屋上に作るという図書館の計画案があるんです。中の本の流れも、トラック状にするというものです。つまり、今まで本に馴染んできた人ばかりではなく、本に馴染んでこなかった人も、ジョギングしに来た時に、図書館と出逢うというコンセプトです。そういうことを仕掛けています。建築が豊かになるということは、非目的的な空間が仕掛けられていることが重要ではないかというのが、私の話しの主旨です。

グラバア：

最後の所を南山短大の教育理念と建築という点から説明していただきたいのですが。

笠嶋：

私は南山短大には何年前に来たことがありまして、中庭はヨーロッパの中世～近世の大学の型式ですね。あの中庭には、共同体の意識が反映されていると思うんです、閉ざされた共同体ですね。この南山短大の中庭は、私はとてもいいと思いますね。紀要を読ませていただきましたけれども、学生と教員の間の距離を作らないとか、対等な学びの共同体を目指されていると思うんです。こういう、教育理念を建築的に反映しないといけないと思うんです。先の計画案で示しましたように各講義室については、包み込むような包容力、内面に向う空間の性格、その中で行われる行為によって作り分けをすることが求められると思います。言葉と言葉のコミュニケーションだけでは、とても接触の機会は少ないと思うんですよね。物を介してのコミュニケーションとか、それから、具体的に人と人が出会うような場をつくるのが重要だと思います。先の計画

案に示しました廊下がクランクするというのはそういう意図です。出会いが意識的になるという。出合いを仕組むとでも言いますか。大阪芸術大学はメインストリートに対して、分かれ道があって、曲がり、クランクがあります、曲がって、何か目に入るというのはとても印象的なんですよ。ですから、多様性だけではなくて、物と人、人と人の出合い方の問題というんでしょうか。そういう意識に引っかかりやすい出合い方と、無意識にそのまま過ぎてしまう出合い方、出会うって言わないかもしれない、そういう出合い方の程度の差も含めて計画することが重要なことかと思っています。

星野：

聞いていてそうかなあと思ったんですけど、兵庫県立大学が新しく安藤忠雄さん(現東大教授)の手によって設計され建設されたんですけど、その時のことを安藤さんが何かの本に書いておられたのが非常に印象に残っています。それは建物と建物の間に必ず隙間をつくったということでした。看護の仕事が人を相手にする仕事であるだけにそのような間が必要だと言っておられ、私もなる程と感心したものです。

笠嶋：

間というのは、建築のキーワードで、いろんな方が意識している言葉です。隙間というのは先程のバシュラールが言っている「片隅」というのも、同じような種類のものだと思います。それから、隙間という概念には、距離関係というのが含まれると思うんですね。つまり、距離を置くというコミュニケーションもあるし、近づくというコミュニケーションもあるし、隙間というのは、最も近づくようなところがあります。それから、一方ではちょっと潜めるっていうような。ですから逆に言うとその隙間は活用されるかどうかかわからなくても、隙間があることだけで、親密性を増すとか、そういうような効果もあると思うんです。ですから、隙間とか間について、日本の建築は、おもしろいと欧米系の建築家は言っています。安藤忠雄の建築に対しても、間が独特なんだとかです。兵庫県立大学はまだ見たことがないので、何とも言えませんが。

星野：

私も写真でしかみたことはないのですが、効率よく、ぎっしりつまっているのではなく、一見無駄なようですがそのような空間があることが人の心をゆったりさせてくれたりするものなんだろうと思います。そのような空間が溜まり場になって学生が集まってきたりするのではないのでしょうか。

笠嶋：

最近、キャンパスとしてですね、まとまった規模で作られているもので、全体で、明快な、建築的意図を展開しているというものは少ないようですが、滋賀県立大学が新しく造られています。あそこは、私は整然とし過ぎていて、平面的なつながりはあるけれども、鉛直方向の関係、見る一見られる、一方は姿を潜めているけれども見えるだとかです。そういうニュアンスに富んだ関係を



造れているのか、実際には見ていませんので分かりません。ヨーロッパの中世都市や環濠集落をデザインコードとした計画をしている大学なんです。品の良い建築群です。マスターアーキテクト方式を実践したという意義があります。私は、学生にとって、おもしろい場所を開拓できたり、造形の若々しさを大学の建築には求めたい。それは見る側の私の性格や価値観も反映するかもしれません。私は、その場所ならではの空間やニュアンスに富んだ場所がつけられているかということに注目したいと思っています。

山口：

最近この近くでも、愛知県立大学が長久手の青少年公園のほうに移転して立派な建物を建てたようですが、大学関係の建築物にも時代的な特色というようなものがあるのですか？

笠嶋：

ああ、あそこですか。

山口：

陶磁器センターの近くです。

笠嶋：

それは知りません。代表的な建築雑誌を見て調べましたが、全部網羅できたかどうか、見落としたものが随分あるのかもしれない。1964年大阪芸大のコンペがあった頃なんです。団塊の世代の、学園紛争の、反省というようなものが、強く計画に反映されている大学とそうじゃなくてですね、整然と計画されている大学との違いを感じます。そういう意味では、立正大学で、意識されていることが、とても重要だと思うんですね。大阪芸大は、現実に作られたものが、青年期の人達にとっては、とてもおもしろいだろうと思います。私の世代も十分おもしろいんだけど、青年期の人っていうのは、ああいう場所を他に持ってないんじゃないかな。都市の中に、例えばああいう場所があるか、ないわけではないんですけどもね。点的にはあるんでしょうね、キャンパスは、都市的に作ったりしますよね。都市の場の多様性、そこに引き寄せられる人の多様性をキャンパスが持っている事例は、少ないんだと改めて思います。

星野：

外からみると何とも奇妙な建物ですが、先生のお話を聞いていると、私は新しくできたJRの京都駅のビルを思い出します。階段がばあっとあって、高い空間がある、決して感じがいいとは言えないのですがそこに沢山の若者が色とりどりの格好をしている。その事の良し悪しは別として、そこには人がしっかりと根をおろしている、たむろしているという実感がして興味深いものを感じました。

笠嶋：

コンペの時に、古都の景観論争など、賛否両論すごかった話題の建築です。ただ、蓋を開けたら、もう本当に人が集まったので、もう批判がふっとんじっ



たんですけども。ただ、私が思うに、あれはもっともっと外部空間的に、外部の様に、作ったほうが良かったんじゃないのかなと思うんですね。ただ、雨の問題とかがあるんですよね。だから、大きな駅ですとそういう雨が降る、雨で汚れるといういろんな問題が発生するので、ああしかなかったのかな、とは思いますが。原広司という建築家が設計されたもので、現在、東京大学の教授をしていらっしゃる方なんです。あの方は、自然発生的な集落をかなりサーベイして、建築に引用していらっしゃるものですから、思いの他、一般受けして、利用者が一挙に集まりすぎて、他の建築家達が驚いてるようです。半分くらいだったら、結構楽しめるかなと思うところもあるんですけど。しばらく、ほとぼりが冷めるまで行きたくないという意見も耳にします。私も行ったんですよ。大阪の帰りに、京都駅で降りて、行って見ましたら、あまりの人の多さと、飲食店なんか長蛇の列ですよ。人が集まりすぎてしまって、京都駅を散策して、帰ってきちゃう人がいるんじゃないでしょうか、京都の町を見ないで帰ってきちゃう。

グラバア：

建築にパワーがあるってことですね。

笠嶋：

私が思うに、人が好きな場所、例えば、ローマの、スペイン広場の大階段とかですね。ヨーロッパの都市空間は階段を上手に使っていますよね、大阪芸大なんかでも、敷地の起伏を生かして、小階段、大階段が随所にあります。ですから、昇るための用というより、座るための用という、時には観客席になる、ああいうのすごく好きなんですよ、人って。気楽に気軽に座れますから。また、京都駅のあの大階段は両側に建物があるために、人の拠り所になりますし、落ち着いた感じもするんです。あの場所自体、人が、寄りつく要素を一杯持っているとおもいます。しかし、駅で人があんなにたまることにやや疑問を感じます。駅は都市への入口であって、都市の方へ人を誘導し拡散してほしい。そういう、都市の他の場所に目的があるんじゃないのかと思います。ですから、都市の戦略としてですね、駅で、目的達成して、帰ってきちゃう人がいるのは問題かなということはあっても、確かにすごく一般の方達にうけてるんですよ。

中野：

すごくたくさんものを見せていただいたので、まだ整理がうまくできていません。最初に見せていただいた建物群についてですが、それぞれの部屋空間の色使いなどでも、バシュラールが主張するような宇宙的感覚というのか、思想性あるいは精神性というのか、そうした要素を多分に孕んだ空間のように感じました。先ほどのお話では、その空間の中に入って来た人間はある方向づけを与えられるということですね。そして建築家はそれをめざして無意識のぎりぎりのところでそれを仕掛けるということでした。また最後のところで学習共同体としての大学についてのお話の中で、目的空間と非目的空間を区別



されてお話しになっていたのを聞いていて、こうした思想性の高い空間というのはなんらかの精神的な目的性に誘ってゆくというのかなと思ったんです。そうすると大学のような建築の場合、講義室などの目的空間として仕掛けられた空間に入ってきたひとは、どんなふうに行為の開放性を与えられるのかがまだよくわからないのです。以前に笠嶋さんが提案された南山大学の新しい建物のプランを見せていただいたのですが、その時の印象では、全体が目的性、思想性が強い空間を仕掛けようとしていると感じたんです。それで、大学の建物では非目的空間が大事だというお話と、そういうある種の方向性を持った空間をつかってゆくということとの関連をおうかがいしたいのです。

笠嶋：

私が最後に結論で言いましたのは、目的空間に求められている空間の性格と、非目的空間で本来目指すべき性格は、違うという話がまずひとつあります。今おしゃった思想性は違う様に思います。私が意図していることは、その空間に身をおいた時にある思想がその人に、こう伝わっていくというような思想性では全くないんですね。それが実は重要なんですけども、ここで言っている空間の性格というのは、基本的なこと、逆に言うと、今作られている建築が、最も基本的なところに配慮されていないんじゃないかという問題提起なんです。写真で見ますとね、かなり大きなものを小さく見ますから、そういうことが少し強調されて、伝わったかなと思いますけれども、例えば、やまさと保育園のあの空間に入った時にですね、たぶん思想性を感じる人はいないと思います。ただ、自由な行為を拘束されることなく、なんだか落ち着くねえとか、自分の空想に浸れるとかですね。それから、あの小さな部屋に入った時にですね、なんかこう、籠もれる、つまり、内面に意識が向う、そういった雰囲気のように、醸し出される性格のことです。ただ、いろいろな部分には建築家の思い入れ、例えば愛などが込められていて、それをですね、思想性と、感じる方はあるのかもしれない。或いは、そう感じる人は、あらかじめ思想性に関する知識を、何か固定観念を持っている人ではないかと思います。今言ってる空間の性格というのは、もしも、それが、思想性として伝わったのなら、意図と違います。私は、いろいろ作りながら、私自身が検証してますよね。その中では、そこで作ろうとしたことの、例えばここはなんとなく居心地がいいなあという程度の表われ方をしていると感じています。ですから醸し出される空間の性格と言ったわけです。そういう誤解をなさる方がありまして、建築というのはなんらかの決断の根拠、つまりその建築家が建築空間を作るためにですね、寄りどころとする概念、方法論、考えていうんですか、それが無ければ組み立てることが出来ませんので、まあそういう話をしますけれども、ただ結果として醸し出されてくる性格というのは、そのバシュラールが言っていることもそうですけれども、私は基本的なことだと考えています。つまり意識が散漫になってしまう空間っていうのがありますよね、そういうの、お感じになりませんか？私では

すね、この空間に、私の後ろで人の流れが発生しますと、とても落ち着かないわけですね。よく住宅のプランなんかでもそういうプランは見かけるんです。そうしますとああこの空間はおちつかないな、つまり人が流れる部分と人が溜まる部分っていうのが意識されていない空間というのは、まず落ち着かないんですよね。すなわち気が散る。行為に浸りきれない空間ということになります。そういう基本的な人の心理を読みながら、空間を作っていく、そういう風に私は考えています。

中野：

私としては思想性と言ってもイデオロギーのような固定化した意味で使ったつもりではなかったんです。例えばバシュラールがというような身体性とか、エリアーデがというような聖なる空間とか宇宙樹的な要素というのがそれぞれの民族や文化に固有のものがあって、なにかを建築しようとするときには、そのひとや集団にとって一番大事な聖なるものを必ずどこかに置こうとするものだと何人もの学者が指摘していることと同じことを意味したつもりなんです。

笠嶋：

なるほど、そういう意味で言うと、個人に対応する空間や特定の意図に基づく空間になればなるほど、空間の性格は、例えば動物が臭い付けするようにですね、住まい手側が作っていく場合もあるし、建築家が、クライアントがそういうものを色濃く求めている場合だと感じればですね、そういうものを出す可能性はありますね。ただし、いろんなタイプの人をここで包容したい、許容したいと想って創る空間の事例を今日は持ってきたんです。ですから、いろんな人がそこに集うことによって生まれるコミュニケーションを引き出すことを意図した空間である場合は、先ほど言いました外向性とか解放性、個人的な臭いよりは、むしろいろんな人がそこでまず居心地良く感じてくれる、そういうところをねらってるわけですね。(やまさと保育園の保育室や、「2つの空」の多目的ホール等は、宇宙を暗示する要素を入れていますが、それは、「知覚界を拡げる」いうならば日常的感覚界を拡げて、もっと大きな世界を感じる為の仕掛けです。優れた建築や、芸術は、日常性を超える意図をもっていると思います。)これとは違って、内密性になればなるほど、個有性、臭いがついてくると思います。ですから大学で、そういう臭いを出すとするならば、非目的的空間の中に空間の性格として、ちょっと濃密さと淡泊さがあって、場の差異ですね。そういう意味の濃密さと淡泊さっていうのはあってもいいと思います、個人的な臭い付けといえは個々の先生が自分の研究室の中や、講義のなかで、そういうものを展開することはありうると思います。コミュニティ建築として仕掛けたいという時はですね、共通項は一体何で、何がここで重要で、何が人を引きつけるだろうかというような、基本的な性格を、そこでは出さなければいけないだろうと思うんです。ご存じかどうかわかりませんが、高崎正治という、コスモロジーを標榜している建築家がいまして、彼でさえも、時と場合と対象

によって使い分けられていると思うんですね。つまりここでは、強いコスモロジー、個と宇宙を表出すべき場所なのか、そうじゃないのか見極めて展開するだろうと思います。ですから建築家は、ここでは一体なにを求められているのか、何をしなければいけないのか、考察の未、解答を出します。ものを作る人は、その人の、それを哲学と言ってもいいと思いますけれども、それがなくては作れないと思いますね。ただ、自分の哲学をそのまま、人に出すものではありません。建築的判断や決定の為の価値基準体系だと思っています。自分の哲学は哲学として持ちつつ、この人はどういう人なんだろう、というようなアプローチですね。それから、ここでは何が求められているかというような、何をすべきかを探り、それに答えます。神秘性を求められれば、それを空間性に込めるということをします。ですから建築家として私が一番うれしい誉め言葉は、「ここまで読んでくれたか」と、言っただけなのが一番嬉しいだろうと思うんですがね。

中野：

今の話はよくわかりました。非目的空間としての通路とかいろいろな人と出会うための空間がとても大事なことだと私も思うのです。今ある多くの大学の建物にそうした要素が仕掛けられていないのも事実だと思います。ただ今回見せていただいたものの中で、実際に教員と学生が一緒にいる空間がシュタイナー関係のものしかなかったものですから、他に見せていただいた大学の建物はみんな外から見た外部空間だけだったものですから。そこでまさに講義授業が行われひとつの小さな共同体ができる空間はどんなものがよいのか、ぜひあらためて聞かせていただきたいんです。

笠嶋：

それは、私も同じことを思いまして、捜しました、大学の講義室のおそまつさも感じました。大阪芸大も一般の講義室は、すごくいい空間だなと思えるものはないんですね。全くないのかといいますと、講義にも使うし、舞台としても使えるという部屋がありまして、実験劇場的な空間になりうる大講義室では興味深い空間があります。一般的な講義室では、空間の性格を作ってるものはなかったんですね。それで、あのやまと保育園の保育室をお見せするしかなかったという訳です。例えばこの部屋もですね、構造的合理性で作られた部屋なんですね。つまり空間の性格をねらってつくられた部屋ではないんですね。日本の大学の講義室のレベルが、今は、これなんだと、残念に思います。あの先程お見せしたプリンターゼミナールの宗教講義室は、空間の性格を持っていると思うんですね。それは、先ほどおしゃっていた思想性うんぬんよりも、ごくごく基本的な、講義に集中できる、私が言っている内向性ですね。その上、ブルーの壁によって空間全体がブルーに染まって精神が濾過される様に感じられます。ここだったら落ち着いて何か話したり、ディスカッションしたり、そういうことに浸りきれると感じます。で、基本的に私は最低限講義室には、そ

の様な性格付けが大事だと思いますね。(後日追記：特定の用途にふさわしい空間の性格付け。) 今日の話で人智学の臭いを出すことが良いのかよくわからなかったので、差し控えたのですが、やはり人智学の空間というのは、深い意図を感じます。例えば病室の壁が鈍角に折れている。そのことの効果、人が病気の時に真にくつろげる空間の性格に気付いているか、気付いてないか、という大きな違いかなと思いますね。人間の心理の深いところまで観察しているかどうか。つまりこの部屋は両側に窓がありますね。これは落ち着かないですね。意識が分散してしまいますね。これを改めるならばこちら側に外向性、その他は壁面にします。これを主の開口部として、こちらが、小さな穴がちょんちょんちょんとあるとか、ハイサイドライトになっているとか、それだけでぐっと落ち着いてくる(内向性)はずなんです。天井はさておいても。天井というのは、もっともっと造形的に可能性があります。つまり先程の教会が、ドームであったり、楕円のドームであったり、つまり宇宙を暗示したりできるわけですね。その暗示の仕方も、様々な、グレードがあると思います。つまり、強く暗示させたいのか、染まりたい人と、染まりたくない人と、分かれたりします。ですから人を包容したい、様々な人が居心地良く集い居て欲しいと考えますと、必要で最小限で、そしてあまり強く性格は出さない。何だか知らないけれど居心地がいいとか、そういうねらい方が適しているのではないかと私は思います。その第一歩としていろんな可能性が天井にはあると思います。壁と開口部については、かなり原則的に言うことができます。同じような開口部が二面にあったり、三面にあったりするとですね、三面にあると、この空間は外向的な空間になります。ですから、むしろ動的な空間にはいいですけども、集中するということには向かない。ですから、先程カーテンを効果的に掛けている例をお見せしましたけれども、カーテンを閉めると、外向的な空間が内向性に変わります。このように、人がこういう状況の中でこういう心理状態になるという、空間の性格と人の心理との対応関係を意識しているのが、人智学的建築だろうと思います。この二年間、建築学会で発行している作品選集の本部審査員をしましたが、毎年、六十作を選んで一冊の本にまとめるんですね。そうすると、多い時で三百とか四百の応募がありまして、それを見ていると、人間観察をしているのかな、と疑問に思う建築が結構あるんですよ。「もの」として建築をとらえている人が多いのか、機能にこたえると思ってる人が多いのか、あるいは人間観察が浅いのか、そんなことを感じます。最初のご質問のお答としては、目的空間の一つである講義室があまりにも貧しいので、いい事例がございましたということ。

中野：

最後にやまさと保育園を例にして技術的なことを聞かせて下さい。あの建物は基本的にはラーメン構造で出来ていますよね。あの真四角な方形の構造体にああやっっているいろいろなものを後付けで工夫されたようですが、シンプルな構造

体に後付けでどこまで仕掛けられるものでしょうか、何か制約のようなものがありますか。

笠嶋：

この部屋はラーメン構造ですが、このラーメン構造というのは、壁は地震に耐えるためにあるわけで、壁構造と比べますと、壁量がかなり少ないわけです。ですからこの2つの構造には使い方の違いがあります。コルビジェという近代建築の一人の巨匠がですねラーメン構造というのは本来、柱と壁は独立したものである。ですから、日本の軸組の木造の建築と関係は一緒なんです。ということは、壁は柱と柱を結んだ平面である必要はないんです。柱が建築を支えるわけなんです。ただ日本は地震国ですから耐震策のない構造は出来ませんが。壁は空間の性格を生み出すためにカーブしてたっていいわけですよ。南山大学の新校舎の多目的大教室で提案した楕円状の曲面スクリーンは、意識の集中を計ったものです。ラーメン構造のメリットとといいますのは、壁、開口が柱梁に拘束されないことなんです。ですから、優れたラーメン構造というのはもっと壁や開口は自由です。この部屋はあくまでも構造的合理性と経済性で成り立っている空間なんです。可能性としてはあるのですが、それをやられていないのは、お金が掛かるからなんです。ですから、空間の性格に対して意識の高い建築家であれば、柱梁の位置と壁の位置は必ずしも一致させないと思います。というわけで、この空間もラーメン構造ですから壁は自由なんです。ですから、やまさと保育園の改修では、構造躯体はそのままにしながら、可能な範囲で自由に壁の位置の変更をして空間の性格を作ってます。具体的に言えば、元の正方形の空間に新しく作った壁を鈍角に折って、角をちょっと斜めに落としただけで、真四角の部屋を楕円に近づけて柔らかくしています。人智学の幼児教育理念に基づく、ドイツの保育園は、もともとあちらの構造がブロックを積み上げて、左官で塗るという構造が一般的で、組積造、ですから壁はもともと自由な形を作っています。

まどか：

いろいろ食事をしながら語りたような話題なのですが。まず、私は大学では、茶室で、人間の関係論や生命論 共生論 日本人の人間観・心身論・文化論・学問論等を展開することを昔から考えています。畳が今では非日常空間として思索空間・集中度も高めるし、日本人の風土に根ざした内発的学問形成の場となりうると考えているからです。今のお話を伺っていると、茶室そのものは、空間の性格として、閉鎖性と暗示性が強いという扱われ方になるようです。教室空間として、茶室や畳の部屋が欲しいという言い方ではすぐには通じにくく、私自身ではまだ畳の教室の意義が実現しにくいのが現状です。

そうなると、少しでも茶室空間の持っている特性や学問性を一つずつ言葉にして言語化・明確化していきながら、日本の茶室教室空間での人間関係論や生命論の実現につなげていきたいところです。これが私の空間的欲求でもあり、



日本の大学教育現場にいる自分としての課題でもあります。

ま、具体的には、まずはその実例の場（やまさと保育園の洞穴的空間）の内容概要・所在を知りたいです。

笠嶋:

先程、茶室を暗示的って言われました、あの茶室というのも結構誤解されている空間だと私は思うんですけど、誤解されているというのは、茶室というのはこちらに日常の空間があって、もうひとつそこから離れたたいという欲求、ですから贅沢を極めた人がですね、その対極にあるものに憧れる。つまり洗練を極めた人がそういう精神を持っているということ。ですから茶室は精神の開放を求めるもの、実は自由な作り方を本来すべきものなんですけれども、現実にはある様式を、型にはめられている空間だと思っている人が多いですね。どういうその意味で茶室と言われたのかなど。私、お茶の先生のお宅を設計しました時に、茶室をかなり調べましてね、で、結局は、茶室というのは自由に固定観念に縛られないで、自分の感性を、私の感性はこうだよ、と表出する場所なんだという理解に至りました。それでいてなおかつ、洗練を極めたものの対極にあるというのが重要なところだと思うんですよ。そこらへんを、誤解されている方が多いように思います。ですから茶室は畳を使わなければいけないわけでもない。畳は親密性を増す効果がありますが。利休が好んだ下地窓というのがあります。あれは左官の塗りかけの状態を窓にしたものなんです。つまり、利休自身も、もう洗練を極めて、そういうものにあきあきしてしまって、もっと自由な精神の発露として草庵の様な茶室を求めたということなんです。ですから私はたぶん茶室の精神から言ったら、もっともっと自由なものと考えています。では何が茶室の心髄かといった時には、内密性だと思います。そこで、まどか先生が茶室の内密性ということと言われたのなら、先程のバシュラールの言うならば、内密性を持つてるといふことの贅沢。それから私は大学というものは、一人では所有できない、けれども共有ならば、持てる空間を備えても良いと思います。先程お見せしたいいきいきプラザもそういう意識で設計しているんですけども、多くの人が建築の一番贅沢な部分っていうんですか、見かけの贅沢ではなくて、私達の心と体にとっての贅沢を知らない方って結構いらっしゃるもんですから、そういう人達に共有できる精神の贅沢ってものも、求めなければいけないと考えまして。茶室を計画してたんですよ。そうしたら予算オーバーしてしましまして、それで、私としてはですね、茶室は人と人のコミュニケーションをこう引き出す、そういうお茶という一つの形式を借りて成り立つコミュニケーションもありますね。で、そういう贅沢というものを集会所にどうしても作りたかったものですから、六畳の和室に炉を切りまして、茶室として使えるようにしました。結局茶室というのは、臨機応変いろんなあり方があるけれども、大事なことは、家の中の最も奥の奥、つまり、一番奥のさらに奥ぐらいの、こんな空間があったんですかっていうような、つま

り日常生活のすぐ近くに、非日常空間を持つってということの贅沢みたいな。ですから、大学にそういう空間があるというのはいいと思います。つまり今の人達は、内密性ということに対して意識していません。例えば子供の頃ってというのは、もっともっと人間が原始的で、欲求も根源的な欲求を抱えているので、内密性を志向すると思うんですけども、親がそういう風に意識していないために、家の方に用意されていない。ということは大学とかコミュニティーセンターとか、そういうところには、内密性を持った空間というのがあるということは、大事だと思うんですよ。やまさと保育園で、籠もる部屋を、とても感受性の優れた先生が、最初に、ここでお茶やりたいねって言ったんですね、だからたぶんあの内密性がそういう風に思われたんじゃないかな。また、人は、体を縮込めることが、何か独特な感覚を引き起こすのかなという気もしたんです。私はあそこは大人が立てない高さなので、実は籠もる空間には、大人が立てる高さの部分も作ったんですよ。ところが、実際入ってみると、結構奥まで、いけちゃうんですよ。利休が茶室で躡口を作ったり、すごく低い天井高を作ったりしてるということは、自分の体を窮屈にしながら潜む、何か空間から感じるものを、魅力と感じていたというようなこともあるのかもしれない。

まどか：

私の場合は、「人間関係の開放性と閉鎖性」の共存をもたらす配慮が必要なようです。人間関係科という従来ある空間の中で、新しく創造する授業創り(体験や実感をもった生命論プログラムづくり)にチャレンジしているところで、またそれが許される職場環境研究環境の保証というか確保があって初めてクリエイティブなチャレンジができるわけです。人間関係科にあって、空間的に「隔離された環境」であって同時に、学科のめざすものに「帰属しているという意識環境」が守られている教室空間の要素が必要なのです

笠嶋：

あの、ほら穴のようなと言われましたよね。なんていいましたか、ほこら

山口：

おこら？

笠嶋：

ほこら、そう祠。小講義室の空間の性格を、ほこらと、言われたという話しを聞きました。ああ洞窟のような空間を求めてらっしゃるんだろうなと感じました。たぶん洞窟のもっている空間の性格は、さっき少し話しましたけれども、人が潜在的に持っている、あんな空間に身を潜めたい、私達が眠らせている感覚の中には、洞穴的な空間は、ひかれるものがある、確実にあります。で、私などは、いろんな空間を作っておいて、その時々のお気持ちに応じて、選び分けたい、というタイプなんですよ。ですから、その時に、最低限欲しいのは、パシュールが言っている4つぐらいに集約できるとは思ってますけどね。

まどか：

建築や伝統的茶室が目指しているいわゆるインテリア的素材を使うことで、授業という与えられた時間と空間を演出していく。

その場で空間アートしていかなければならないというのが教室の限界です。機能的に平等中立になっている教室の中で、例えば、21番・3番という与えられた空間の中で、素材をその授業時間だけ持ち込んで、落ち着いた居心地がとれたらなあ、工夫していくのが現実的な対応になるわけです。が、不十分で物足りない。

笠嶋：

日本の、伝統的な空間というのは、壁がないと言われるわけです。つまり、建具はあるけど壁がない。ということは、柱と屋根だけみたいな空間なんですけれども、で、そうすると、落ち着かない空間なんですよ。ところが、特権的に落ち着ける場所として床の間があります。それから壁がなかった為に、衝立というようなね、あるいは、几帳ですか、そういう小道具が発達したという風に一般に言われています。最初の茶室も広間をですね、衝立で小さく区切って、茶室として使ったりしたんです。その様に考えますと、私が言っている壁というのはですね、衝立的な装置でもいいんですよ。ただ、普通の衝立よりは長く欲しいんですよ。長くないと、人に対する効果が乏しいので。ですから、衝立的な、つまり上の方では空間がつながってても何か長い壁がですね、つまり仮設的な長い壁でもいい。空間の性格は出せると思います。

まどか：

日本語のいろはワークや生命論、「いのちとことば」のワークでは、今は畳幅の白い和紙をロールしておいて、授業の時だけ広げて敷く。細長い和紙様の素材を空間に広げることたまたみ空間・非日常空間・ワーク空間の雰囲気醸し出し、場づくりをして授業をしています。

笠嶋：

あの、農家茶屋ってのがあるんですよ。農家茶屋が流行った時というのがあるんですね。その農家茶屋が名古屋にありまして、それを移築するために、まず解体するのを見に行ったことがあったんです。農家茶屋が流行ったのは、先程の洗練、贅沢を極めた人が農家に憧れてる。つまり、農家でもなんでもいいんですよ、商家が農家を持ってるわけです。農家茶屋はおもしろくて、廊下に差しかけの、低い屋根を作って、ですからある意味では茶室の成り立ちをそのまま農家の中でやってるようなふしがあるんですけど、玄関の横の廊下に一部低い屋根を作って、廊下のちょっとした膨らみみたいな、二畳ぐらいの茶室、これまたすごく魅力的なんですね。ですから茶事という形式を借りたパーティーをするための農家つまり、ゲストハウスなんです。

グラバア：

最後に何かあればせっかくですからね。



伊東：

以前に、九州の精神病院に行ったことがありまして、その前院長が、建築のデザインをされて、病棟の壁をピンクに塗られたんです。患者さんにとっては、それは、慣れるまでは、大変だったみたいですが、それは治療的にはよいというのを聞きました。建物によって、人が変化していくということもあるのかなあと思いました。

笠嶋：

あの、今の話だけをお聞きすると、住んでる方にとって、変化した方向がいい方向なのか悪い方向なのかは、ちょっとわからないですね。例えば建築家が特殊解としての建築を創く場合は、施主とのコミュニケーションをかなりして、例えば、さっき言ったように言葉でのやりとり、それから潜在的なものを読むとか、そういうプロセスを経て、やりますから、この人にとってはこういう住まい方がいいんじゃないかとかですね、そういうことを、提案として出すんですよ。それがその人の、潜在的な要求と合致してるのかどうなのか、それがなかなか難しいところなんですよね。ですから今の話だけでは、それはよかった例なのか、迷惑な話だったのか、ちょっとわからない。但し建築から触発されることはあると思います。

伊東：

私が聞いたのはよかった方で聞いたんですけど、でも、危険性も絡んでくるかなという・・・

笠嶋：

危険性、そうなんです、その危険性を恐れるということは、逆に言うとプロセスに問題があったかもしれない。ただコミュニケーションって、理解しきれないわけじゃないんでね。ただ、人によっては、そこから何か新しい部分を発見してくれたり、それもまた自分なりにいい方向に発展してくれてる人っていますよね。ですから、例えば、この人住まい方上手だな、とかですね。ああ、おもしろい使い方をしてくれてるなあとかね。逆に、設計した側である私達が、思うことだってあるわけですね。建築家の側はいい方向にいくように思って設計するわけですし、哲学に基づく積極的提案を押しつけられたと思うよりは、それを私なりに生かすとどうなるかというような、発展的に住んでくださると、より、いいんじゃないかなということを感じつつ聞いてたというのが一つと、それから、精神病院の話ですとね、ピンクという色は、例えば、白とピンクを比べるならば、ご存じかもしれませんが、白って人を緊張させるんですよ、それに対して淡い色というのは基本的に壁の存在を和らげる効果があります。で、その方がどういう病気なのかに、もちろんよりますけれども、精神病になる人っていうのはやや緊張系の人っていうんですか、過敏というか、そういう人には、白はよくないと思うんですよ。つまり緊張させる空間とか、緊張させる色とか、たぶんそういう意味では最初ピンク色に拒絶反応があったの

が、なぜかなと疑問ですね。というのはピンクもきついピンクと柔らかいピンクがありますよね。そのせいかもしれません。やまさと保育園の保育室の壁の色はピンクです。人智学による幼児空間の色は黄味を加えた柔らかいピンクの、もあもあ、塗りむらの様に濃淡をつけて、意図的なもや状なんです。ですからある人が、空のような壁なんだっていうんですが、つまり存在感のない壁なんです。霊学的には、この色は、胎児が子宮の中で感じていた色環境だそうです。最初に真っ白に一度塗りますから、その時とピンクのもやもやを塗った時では空間の感じがかなり違うんです。今はもう汚れていますので、ちょっと当初のもやもやの感じが少しぼけてるかもしれませんが、淡いもやもやっていうのは空ですから、精神病院にはすごくいいと思います。つまり、壁で守られているように感じられながら、緊張を強いけない、という、何か淡い色っていうのはいいはずで、独特ですが。

グラビア：

ちょっと時間的なものがありますので、今日はこれで終わりたいとおもいます。どうもありがとうございました。

資料

ガストン・バシュラール（1884－1962）

ディジョン大学教授、ソルボンヌ大学教授。科学史、科学哲学者、想像力の現象学的研究者。

著書

「火の精神分析」1938

「ロートレアモン」（ロートレアモンの世界 思潮社）1939

「水と夢」1942

「空気と夢」（「空と夢」法政大学出版局）

「拒否に哲学」思潮社

「科学的精神の形成」

「大地と意志の夢想」1948 思潮社

「大地と休息の夢想」1948 思潮社

「空間の詩学」1957 思潮社

「夢想の詩学」1960 思潮社

「蠟燭の焰」1969 現代思潮社

* マスターアーキテクト方式

全体を統括するマスターアーキテクト(M・A・)と数人の各ブロックを担当するブロックアーキテクト(B・A・)によって共同設計する方式